明治三十二年五月二十五日發兌

女鑑

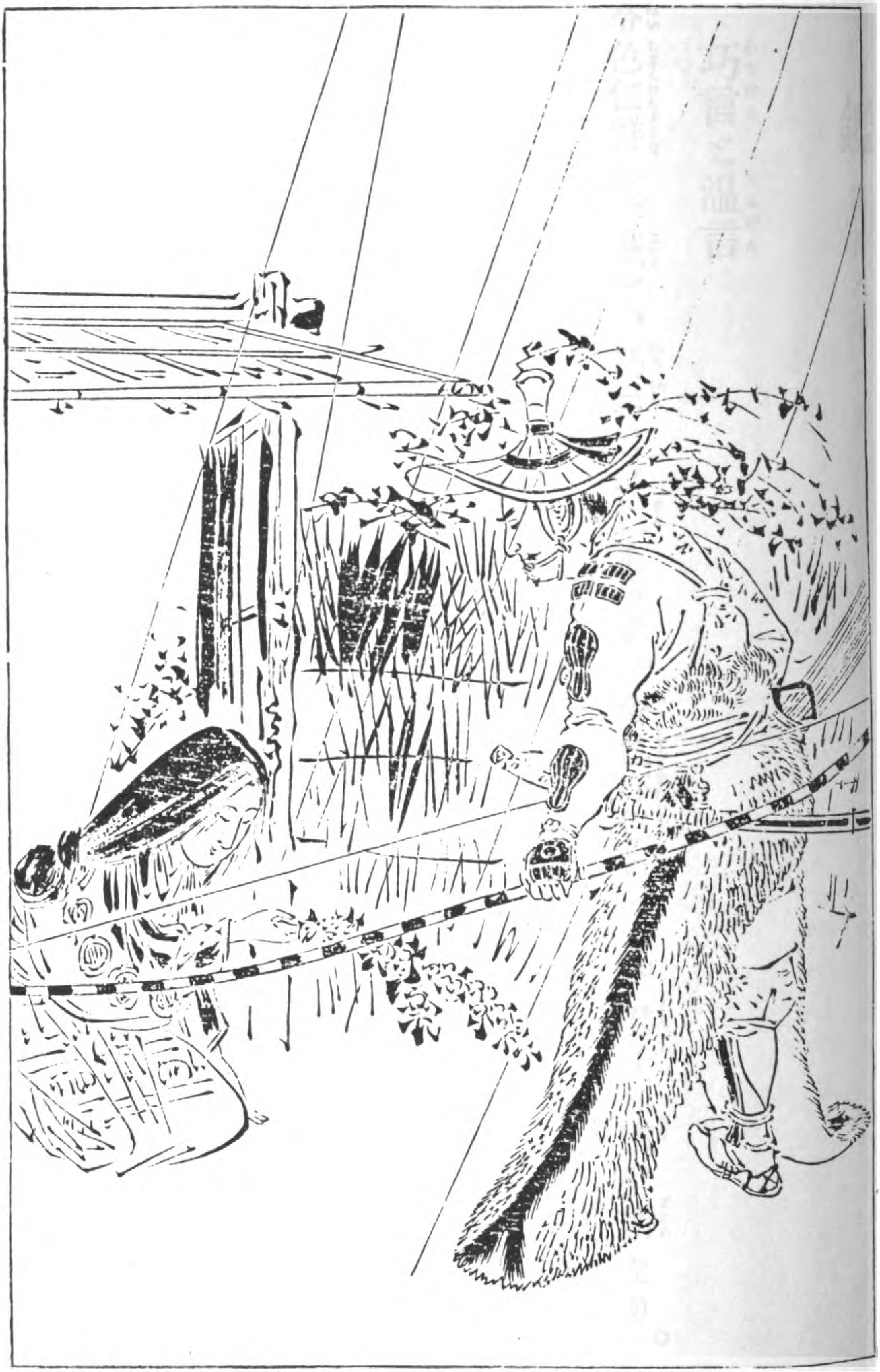
第百八拾壹號

東京國光社

女鑑第百八拾壹號

目録

山吹の少女



巧言と温言

巧言令色仁鮮し。誠や、巧言には仁あらず。令色亦仁あらず。君子の憎む所たり。しかるに、人、此の巧言と、温言とを同一にして、温言をも憎み、令色と和色とを同一視して、やはらかき色をも憎むあり。之は、紫のあけを奪ふを憎みて、紅をも憎むが如く、坊主にくしとて、袈裟をまで憎むが如し。大なる僻言なりかし。巧言とは、言葉を巧にするにて、俗に、うまき事といふに同じく、己を利せんと欲し、ひたすら、人にへつらひ、理、不理となく、あながちに、人をほめそやし、不利なる事をも、利ありげに説きすゝめ、したひもせぬ人を、ひたすら、したふげに、敬しもせぬ人を、深う敬するやう、いつはりの心を信しやかに、口にかざり、巧に言の葉をあやにし、偏に、甘きを以てすゝむるにて、甘きものはきらふ人まれなり。之をよ

ろこび、之を信じ、之を食して、遂に胃腸を損ず。甘言、よく、人の耳をきづつけ、人の心を損じ、遂には、人の家をも身をも損ぜしむ。盗賊の言、誠に、憎むべし。されば、洩言、巧言、君子は之をいとひて、耳にさけ、又、口にさく。令色、また、へつらひの色をてらふを云ふなり。温言、和色、決してしからず。たゞ言葉をやさしく、色をやはらぐるにて、決して、巧言令色と同一にすべからず。それ、顔は、心の内をうつすものにて、言葉は、心をうち出すものなり。故に、人、よろこべば、顔色うるはしく、言葉、また、をかしげなり。人、怒れば、顔色むづかしく、言葉も、また、むづかし。かなしき時は、愁あらはれ、たのしき時は、他處目にもおもしろげなり。されば、心靜かなれば、言葉もおのづからおちつき、さわがしき時は、言葉せはしく、やさしきものは、言葉もやさしく、顔もうるはしく、心こはきものは、顔もこはく、言葉も亦情あらず。人は云ふ。否、しからず。東京ものは、心やさしき人も、言葉はあらく、上方ものは、心こはき人も、言はやさしげなりと。されど、それは、たゞ、言葉の長きみぢかきと、ふしの高きひくきとにあるのみにて、上方

言葉の中にも、誠にやさしきといつはりとあり。東京言葉の中にも、誠にこはきと、やさしきとあり。温言、和色は、さやうのものにあらず。たとへ、少しの長短はあるも、ふしの高低はあるも、たゞ心の和をうつし、心のやさしきを説く言葉と色を云ふにて、女子は、言葉やさしからずばあるべからず、女子は、容姿柔順ならずばあるべからずと云ふ。しからば、心を柔和にすべし。心をやさしくすべし。心やさしければ、氣、おのづから和し、かんばせ、つくらずしてやはらぎ、言葉、かざらずして、やさしかるべし。初雪やあれも人の子たるひろひの和言、人の子を思ふやさしき情のみてればこそ、やがて、言に發したるなれ。かしこけれど、醍醐天皇か、つねにうち笑ませ給ひけるも、また、人を近けんとの、やさしき大御心よりうつし給ひし叡顔にて、やさしき心あるものは、必、言語、擧動、亦やはらぐものなり。紫のあけを奪ふがにくしとて、紅をまで憎むべからず。巧言憎むべしとて、また、温言をすつべからず。柔和和順を尊ぶとも、又、あながちに、あしき事に和し、よからぬ事をもはめろやす、これまた仁なき行とや云はまし。よく朱と紫とを、分

けあきらめて、行ふべきことにこそ。



論説

女子の兄弟姉妹に對する道

岸田松三郎

兄弟姉妹は、已と均しく、父母より骨肉を分ちたるものなれど、之を愛し、之を護ること、猶我が身の如くせざるべからず。又、其の吉凶禍福を共にし、憂愁、毀譽、榮辱を共にし、其の利害得失、相謀り相助けて、永久に其の交を親厚にせざるべからず。父母に亞ぎて、最、親しきものは、兄弟姉妹なり。父母に亞ぎて、最、慕はしきものは、兄弟姉妹なり。故に、兄弟姉妹の交際は、道理を以てするにあらずして、寧、愛情を以てすべきものなり。若、理を以てせんとすれば、聊の事にも、是非曲直の爭論常に絶えず、相互の愛情は、日々に消却して、一日も、其の交を温むる日なかるべし。總て、一家親族の間の交は、理非を擇むより、寧、親愛の情を以て、結合するものなり。故に、少し

く理に缺くることありとも、情を以てせば、却て其の交を圓滿ならしむるものなり。然るに互に銖錙を爭ひ、曲直を論ずるより、相互の愛情日々に消損して、爭端愈密に入り、其の際涯を見る能はざるに至る。是必竟親愛を樂むより、己の利便を好む心深きが故なり。彼の兄弟姉妹の曲直を法庭に爭ふが如きは、大に耻づべきことなりとす。

抑、兄弟姉妹は、其の幼なるや、決して、相爭ふことなし。漸長じて、理否曲直を分別し得るに至て、多くは、爭を惹起すもの多し、惟ふに、其の幼なるや、弟妹たるものは、己の智慮身體、總て兄姉に及ばざるを以て、一に其の庇護に頼り、事を辨ずるが故に、事の是非曲直に論なく、一に兄姉の言行を信じて、之に依頼するより、兄姉たるものは、其の智慮の足らざるを憐み、其の身體の脆弱なるを憫み、己の勞苦を忘れて、之を擁護するを厭はず、故に弟妹は、兄姉に信順し、兄姉は、亦、弟妹を愛憐擁護して、玆に友愛の道、全きを得るなり。若、夫、弟妹の齡、未、理否を辨ずるに至らざれば、諸事我儘の擧動ありとも、却て之を憐む念を起して、之を寛假するが故に、寧、相互の交情を害せざるなり。然るに、各既に成長すれば、心に是非曲直を分別する能力を備具し、身體は既に獨立し得るが故に、互に相愛し相敬する心深厚なれば、相互の交情、益濃厚なれども、若、一歩を誤りて、利己心の正義心に勝つことあれば、則玆に兄弟姉妹爭鬪の端

を發くなり。

凡そ、人として、利己の心なきはなし。此の心は、己を立つるには、必要なれども、若、此の心に制限なきときは、只管己を利せんと願ふより、知らず識らず、他の利を浸蝕し、或は他の浸害を恐れて、骨肉の親を遺るゝに至るもの、往々之あり。抑、人の此の世にあるや、各、其の利を享受する分量あり。故に、一人其の分量を超越することあらんには、必ず他の利を浸蝕せんこと、蓋、必然の理なりとす。故に、各、其の分を守り、其の量を越えざらんには、此の社會は圓滿なるべしと雖、兎角人には勝他心と利己心とのあるがため、他の己に勝ることあれど、之を忌み、他の利の己に越ゆることあれど、之を妬みて、利と利と相爭ひ、理と理と相戰ひ、遂には天然の性情に背き、骨肉の親に悖るに至る。殊に婦人は、多くは妬忌の偏僻あり、猜忌の心あるものなれど、假令、他人に交るにも、勝他心と利己心との傾きは、人の弱點なることゝ思ひ、含忍正義の心を以て、之を禁壓せんことを忘るべからず。矧や、兄弟姉妹の間柄は、理を以て交るべきものにあらずして、情を以て交るべきものなるをや。

蓋、兄弟相互の交りと、姉妹相互の交りとは、其の友愛の點に於ては、敢て、軒輊することなしと雖、然も男女、各、其の性情を異にし、又將來其の任務を同うせざるを以て、

其の相交る間に、幾分の差異なき能はず。即、男子は其の局量寛くして、其の爲す所は、粗宕なれど、幼より老に至るまで、其の感情、思慮、皆婦女子の如くならず。又、處世の境遇も、多くは一家の支柱となりて、專、外事を處理するものなれど、廣く社會の狀態趨勢を知り、又、其の交りも汎くして、其の信用も、亦、大に女子と異なるものなるが故に、兄弟姉妹は、互に相助くるものなれども、一旦事あるに當りては、其の力を男子に假ること多きは、世間普通の狀情なり。されど婦人は、假令己の其の昆たる位置にありとも、其の弟に對して、懇到周密に、其の力を盡して、決して驕傲慆慢の心あるべからず。己の未其の生家にある間は、能く其の弟妹を遇して、深切ならば、父母は必ず、其の歡びを致すものなれど、是亦、父母の心身を慰安する一なるべし。且夫、家にある間に、能其の弟妹を待する心あらば、異日良夫の弟妹を遇するにも、亦、大に其の心得となるものなり。一旦他に歸ぎて、己の榮昌幸福なりとも、之を以て、其の弟妹に誇るべからず。又、枯涸不運なるを以て、其の弟妹を羨むべからず。其の兄姉に對するや、順序より云ひても、固より長上なるを、幼少の時は、思慮淺く、身體孱弱なるが故に、衣服飲食の事より、諸般の事に至るまで、兄姉の保護誘掖の力を待つこと多きを以て、之に敬從順服して、聊も、我意我慾を張るべからず。既に成長して、萬般の事、皆、獨力

を以て辨じ得るに至ると雖、未經驗の乏しき所あるを以て、恭敬柔順にして、怠慢の心あるべからず。是、異日、婚家の長上に事ふる道を習ふに均しければなり。且夫、兄姉は、己の父母の既に世を去りたる後は、兄に對しては、父とし事へ、姉に對しては、母とし事へよとは、世間普通に稱ふる所にして、又其の味ある言なることを知る。何となれば、兄姉は、己より世故に習熟すること多くして、世の風潮を知ることも、亦、詳なるものなれば、諸般の事を謀りて、其の力を假ること多きを以て、己と年代を同うする父母と思ひて、之に敬從すべし。又、己の弟妹に對しては、己と均しく、父母の骨肉を分與せられたるものなれば、力の及ばん限りは、之を愛し、之を護り、其の艱難幸福を未然に察して、之を避け、之を享けしめんこと、猶、己の身に於けるが如くなるべし。偖人は、父母の膝下にありて、其の擁護の下にある間は、假令、聊か利害の異なるがため、相爭ひ、相怨む跡ありとも、暫時にして互に、其の疾怨を解くに至るべし。然れども、一度他家に嫁して、各、子女を擧ぐるに至れば、其の子女を愛し、又其の良夫の心を以て心とするより、茲に全く己の室家にありし時の如く、兄弟姉妹の交りを同うする能はざるは、世間普通に見る所なり。猶、其の齡の各、進で全く一家を料理するに至れば、各、其の家の利害を圖り又、其の子孫の繁榮を計るに汲々たるより、益兄弟姉妹を思

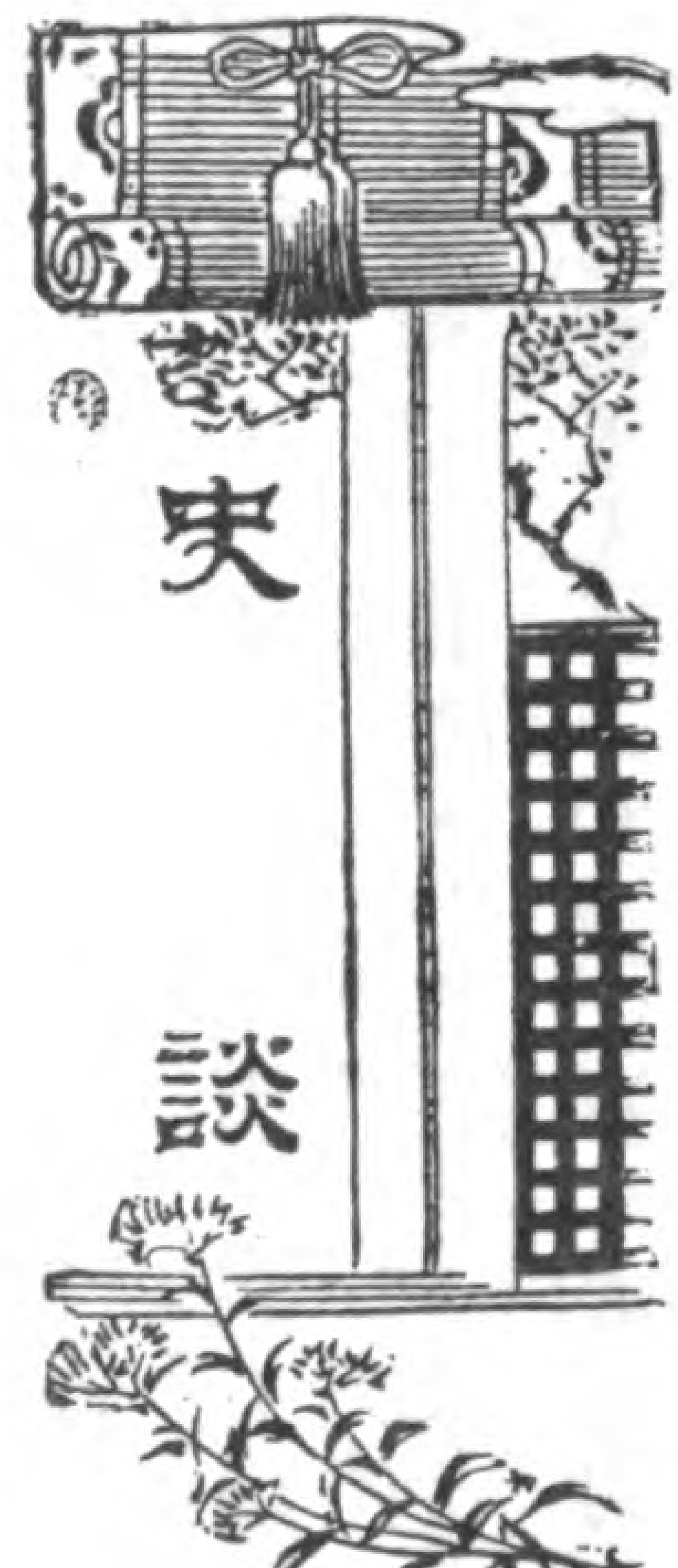
ふ情の疎薄に流れ易きものなり。況や、東西其の居所の離るゝに至るものをや、是の間に處して、能く友愛の道を全うせんことの頗る難きは、亦一應其の理なきにあらず。何となれば、女子は已の生家にあると、又婚家にあるとに拘はらず、皆獨斷專行する能はざるものなれば、假令己の欲する儘に、兄弟姉妹のために計らんとするも種々の事情に纏綿掣肘せらるゝがため、遂に其の本心を全うする能はざるものなればなり。然れば女子は、一旦人と成りては、天然親愛の誠を、其の兄弟姉妹に至すこと能はざるか。否、決して斯る理はあらざるべきなり。

夫、女子に獨斷專行することを許さゞるは、其の理由、種々あるべしと、雖、良夫に對しては、專ら巽順の德を守り、假令、世蠱に幹たるべき材幹識見を備ふるとも、女子の本務は補翼の任にあるを以て、能く其の本分を守り、良夫の任務を自在ならしめんことを務むるものなれば、何事も良夫に諮稟して、之を行ふは、主として、良夫を尊敬し、又自己の任務を重ずるものなり。父母舅姑に對して、獨斷の處行あるときは、之其の父母舅姑を無するものなり。若、父母舅姑の既に退隱して、家務の萬般を負擔するに至れる後と雖、父母舅姑は、已より閲歴高く、又、常に家務に心を勞するものなれば、常に其の意見を尋ねて、措辨するときは、一は已の缺漏を補ひ、一は父母舅姑の心を安せし

むるものなり。材識あるものにして、猶且此の如し、況や、其の他をや、蓋、女子は、一家を治むるに至れば、専ら家室の裏にあるを以て、其の交際、自狭少に趣き、随て世態の變遷社界の風潮を知ること少し、故に、眼界日に狭く、識見日に降り、加ふるに、其の局量の偏少なるを以て、父母舅姑或は夫良に就て、其缺を補はざるべからざるに至るは、世間普通の狀態なり。故に専斷するを許さゞるは、啻に婦德を全うするがためのみならず、又止を得ざる勢なり。

此に由て之を觀れば、家の貧富を問はず、身の貴賤を論せず、既に舅姑良夫に事ふる身となりたる上は、進退動作、皆己の欲するまゝに之を行ふ能はざるは、是亦必然の理なれば、之を以て、己の兄弟姉妹に、親愛の情を致す能はずとするは、大なる謬見なり。試に見よ。頑囂瞽瞍の如きも、舜の之に事ふる烝々として之を納むれば、遂に化して慈父となりたるにあらずや、況や、頑迷此の如くならざるものをや、婦たるもの、翼々として巽順の德を守り、孜々として其身を勞し、之に亟ぐに、貞潔雪の如きを以てせば、舅姑良夫、爭でか之に感應せざらんや。既に婦たる道を全うして、舅姑良夫の感應することあらば、己を愛し、且延て、己の兄弟姉妹に及ばんことは、是人情の然らしむる所なり。蓋、僧を憎んで、其の袈裟に及ぶは、人情の常なれば、僧を愛して、其の袈裟に

及ぶも、亦自然の情なるべし。故に、已婦たる道を全うして、愛を良夫と舅姑とに得るあらば、假令、已は齷齪として、已の兄弟姉妹のために計らずとも、良夫と舅姑との愛を延て、之に及ぼすべきは、理の最瞭らかなるものなり。此くの如くして、已の力に許す限りは、兄弟姉妹の親情を致し、其の及ばざる所は、之を良夫舅姑に仰がば、是兩家の親しみを厚うし、又已の本心を全うする平生圓滑の道なり。



山吹の少女

鹽井ふく子

木曾義仲は勇あり、謀あり、大將の志をたもち、慮ある者なれど、惜いかな、一字一文をもしらず、さるがため貴賤の分をしらずして、遂に身を亡ぼしぬ、義仲をして義あらしめば、又、たぐひなき將たるべしと、楠公の惜しみけるもげに道理にて、學びて道を知り、天を知る。楚の項羽百戰百勝、勇あり、謀ありしかど、學なかりしかど、其の君を弑し、人心を失ひ、遂に烏江の餓鬼となりぬ。故に文武をわきまへずば、良將たるを得ず、南北朝分かれてより、世はかるかやと亂れ行き、人は干戈をのみきたへて、和歌文章は、殿上人、女房の遊戯に歸し、いたづらに虎狼の勇を尊びて、文武の將まれなるむさし野に、ひとり、言葉の花を咲かせたる、太田道灌こそ、希代の良將と云ひつべし。

而して太田道灌も、亦そのむかしは、たゞ勇を尊び、武をのみきたへたる猛兒にて、いたづらに虎をいけはぎて、其の勇をほこり、狼をさかはぎて、其の武をれごり、豪放人をあなどる事多かりけれど、父道眞之をいましめけるやう、子の容貌魁偉、且つ穎悟にして膽大なり、此の如くにして禍なきもの少し、子の言行、つとめてつゝしめよ、たとへば板橋の直ければ則ち立ち、曲れば即ち倒るゝが如しと、道灌、忽ち屛風を揭げ來て、直ければ倒れ、曲れば則ち立つ、如何にせば可ならんと、父默然として入れり。後、又、父手づから、驕者不久の四大字を書して壁にかけ、我が子をめして之をよましめ、斯の意如何にぞやと問ひけるに、道灌對へて、願くば、子一字をそへまはしとて、乃ち父が筆をとり、不レ驕亦不レ久の五字を書したり。父怒り、扇をあげて道灌をうちぬ。かうやうに父のいさめにも從はず、勇、ますく＼ほこり、武ますく＼驕り、わしたに山にかけりて、健鳥をいけどり、夕に野に出でゝ、猛獸を挫き、匹夫の勇をほしいまゝにふるひ、未だ人情に通ぜざりけるが、一日、金澤山に狩し、驟雨にあひて、あまやどりする所もなく、急ぎ六浦を過ぎりしに、一の弊屋ありたり、道灌其の内にとび入り、簑をかされん事を幾度か乞ひしかど、應ふるものなし。ややありて、一人の少女、欵冬一枝を持ち出で、口なしの色をかしげにほゝ笑み示せど、道灌は其の意を解せず、みのからんとて立ちよりしを、もとめぬ枝をとり出でしに心よろこびずして、そのまゝ雨にぬれて家に歸れり。あはれ、この口なしの色こそ、誠に、簑得たらんよりは、ありがたき賜物にて、雄略天皇が舍人を斬らんとし、獸の故を以て、人を殺す、豈禽獸とことならんやの皇后が諫をきかせ給ひ、人は禽獸を得たり、朕はひとり善言を得たりと、よろこばせ給ひし御事にもかよひてめでたけれ。道灌歸りざま、此事を臣士に告げけるに、流石は老士、幸に之を判じ、それは簑なしと云ふ事にやわらんと云ふに、道灌その故をと

へて、古歌に、

　七重八重花はさけども山吹の
　　みの一つだになきぞかなしき

と候へど、簑なきに寄そへしめせしならんと。道灌之を聞き、大に己を慚悔し、感歎やまず、はじめてもののあはれを知り、和歌のいみじきをさとりて、遂にしきしまの道に分け入り、その奥旨を究め、遂にやんごとなき文武の良將となるを得たり。寛正五年京師に朝し、　後土御門天皇に謁し、武藏野をとはせ給ひしに、道灌とりあへず

　つゆれかぬ方もありけり夕立の
　　空よりひろきむさしの丶原

又、隅田川の都鳥はと問はせ給ひけるに、

　年ふれど我がまだしらぬみやこどり
　　隅田川原にやどはあれども

又、風景を問はせ給ひしに、

　我が庵はまつむらつゞき海近く
　　ふじの高根を軒ばにぞみる

叡感なゝめならず、御衣を賜ひてのたまはく、

　むさしのはかるかやのみと思ひしに
　　かゝる言葉の花やさくらん

と、なはあまた引出物を賜はりけりとぞ。實に干戈旁午、兵馬倥偬の間に、かゝる言葉の花さかし得たる、少女がしめせし山吹の一本故にして、道灌が敷島の師は、此のやぶれやの少女とや云はまし。あはれ、虞美人が美にかふるに、此の少女が學を以てし、巴が勇にかふるに、此の少女が才を以てしたらましかばと思ふにも、やんごとなきは學問にてこそ。

田道將軍の妻

磯野德文

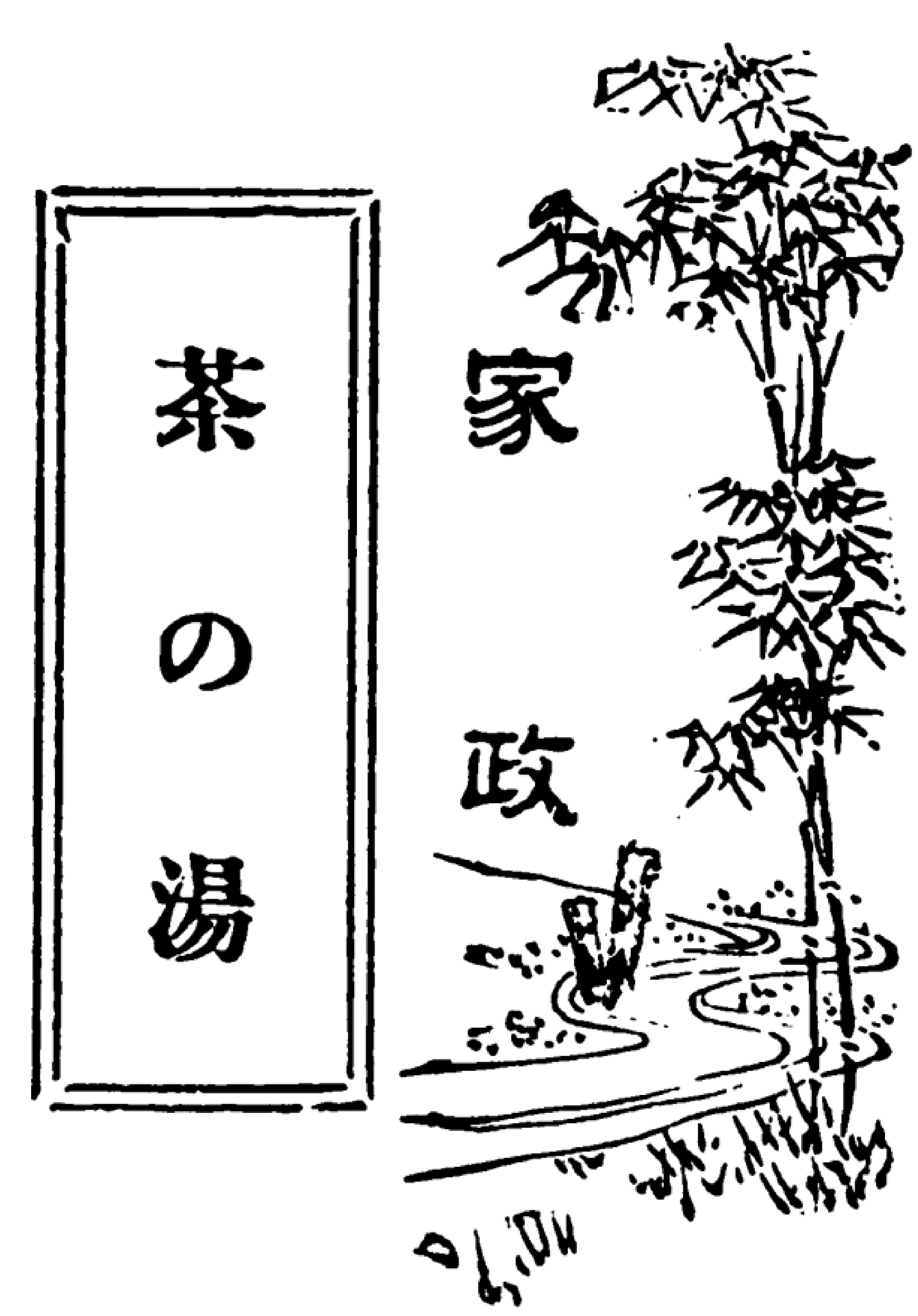
田道は、上毛野君の祖、竹葉瀨が弟なり。仁德天皇の御代に(五十三年)新羅の國そむきて、貢物奉らざりしに、田道を玄て精き兵を率てうたしめしかば、(五月)

悉くうち平げき。後(五十五年)蝦夷そむきぬ。すなはち田道をつかはしてうたしめたまふ時に、軍蝦夷にやぶられて、田道は伊寺の水門(奥州)にて身まかりぬ。ここに從者田道の手纒をとり得て、かへり來て、その妻にわたへつるに、妻その手纒を抱きて、縊れ死にき。皆人これをきゝて、涙をおとしき。この後。蝦夷また人民を略むる因に、田道が墓をほりしかど、大なる蛇墓より出でゝ、眼を瞋らして、蝦夷らを數多くひころしつ。にげて免るゝものわづかに二人三人のみなりき。時の人みな、田道は身まかりしかども、遂にわだをむくいつといへりき。

田道が妻の、身うせたるがよしとには、あらねど、一向に頼める夫の難にあひて、死生を共にせしが心ぞへいとあはれなり。されど或る婦女の歌に、

人と生る事は難きを邂逅に
生れる我が身は死も生も君が隨々

ともよめり。



茶禮初學

孤峰庵碌仙齊不美
關　葦雄

朝茶の湯の事

一そうじ等は、宵に致し置き、朝六時より路次に水を打つ仕法、前に同じ。釜掛くる事、掛もの掛くる事、朝七ッ時也。

不美曰はく、掃除等は、宵に致し置くとあるは、則、前日の午後ならん。朝六ッ時は、今の午前六時なり。釜を掛け、懸物を掛くるも、同時間とあ

るは、露路へ水を打つて引續させよとの事也。
一初炭の時、灰器、引入、片口、持出で丶、釜へ水を指し候事、(此の時極めて水さすなり。是は夜明けて釜掛け、客來るに間無き故、水少量に入れて、釜かくる故なり。惣體、さら〳〵とする事、朝茶の湯の法也。風爐の節も、炭は爐同樣にいたすなり。
註釋不美曰はく、初炭の時、灰焙烙を持ち、勝手に入り、片口、或は藥鑵にても持出で、必釜へ水を差す事故實也。其の時は、片口湯桶ならで、先多く木地たるべし。登の上に、茶巾を疊み、水を能く含ませて載せ置き持出で、釜に向ひ座し、茶巾を釜の蓋の摘みへかけ載置き、湯桶の蓋を取り、打返し腕に置き、茶巾ごと釜の蓋を取り、湯桶の又打返したる上に、前の緣へかけ載置き、茶巾を湯桶の口の下の方に、折目を下にして右の手にて當添へ、左手にて片口の手を持ち、釜へ水を差すべし。見斗ひ、釜の鐶付の邊に止るべし。差終りたらで、片口を下に置き、右手の茶巾を、口の下の方を拭ふ心持して取り、又釜の蓋の摘に持添、釜の蓋を締め、直に其茶巾にて、釜の蓋及釜の肩の處より下へ、左の方より右の方へ拭ふなり。前の方も同樣。是は釜の濕度あるものを、濡茶巾にてふく故、湯氣立登りて、大に風致に見ゆるものなり。其の時、客は能景色など言ふものなり。終りて片口を持入り、再出で丶釜に向ひ座し、鐶を取り、左右の手にて割り持ち、釜へ掛るより末は、常の炭手前の通り故、爰に略す。次に惣躰さら〳〵と云ふ心持は、餘り遊緩ならざる樣、朝の事故、僅少早めにと云ふ解釋、或は相當ならん。其の心得にすべし、又風爐茶にても、朝の茶に限り、喰前の炭なり。
其外は懷石に、其日の河岸の生魚を遣ふ譯には至りがたし。前日の物を貯置く歟、又は鳥類、鷄卵、又は、精進料理等を心して、客に進る樣にすべし。

菓子は當日製にても、間に合はせ可申、客も朝茶は餘り寛々と落付込まず、晝の茶の邪摩妨を不成様、結了する様にすべし。

一夜咄の茶の湯の事

夕七つ時より、掃除申付け、暮前水を打、日暮て外待合へ、烟草盆手焙出し、金燈籠水桶の所へは、木燈籠ともす（但外待合無レ之、腰掛斗の所は烟草盆、手焙、圓座行燈等出すなり。座敷不レ殘戸入る。其の中窓一個所、程よき處を障子にして置く也。

一數奇屋の中掛物無之、短檠或は竹檠、木檠、木燈臺、其席によりともすなり

但四疊半以上は、短檠以下は竹檠なり。

一短檠竹檠等、燈心七筋、長燈心なり。餘は五つ筋、長さ六七寸也。石燈籠、木燈籠、露路行籠、總て二筋、長さ六七寸なり。右何れも黒文字揚枝付くるなり。

（未完）

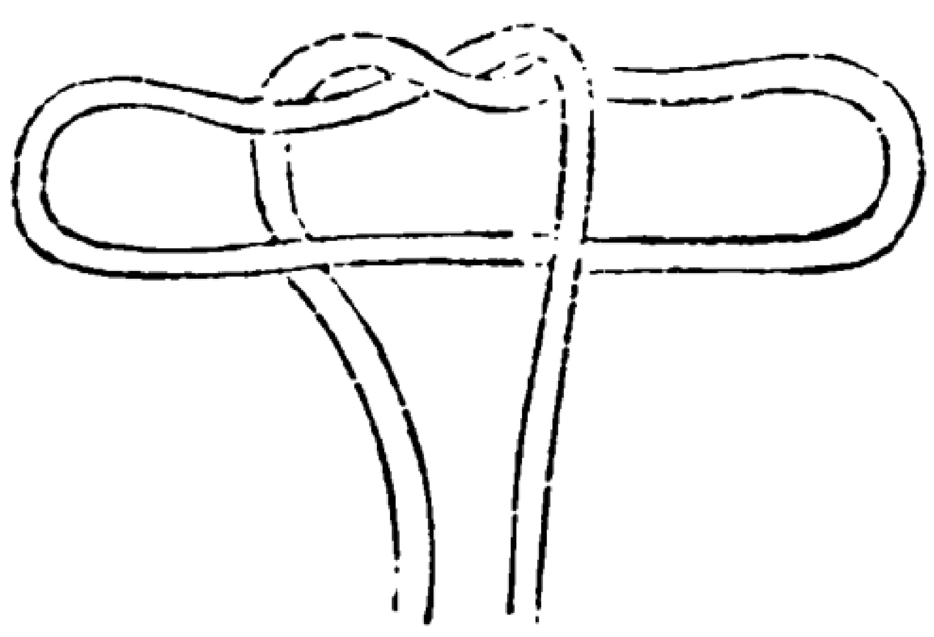
新撰結物百種

百草庵一無

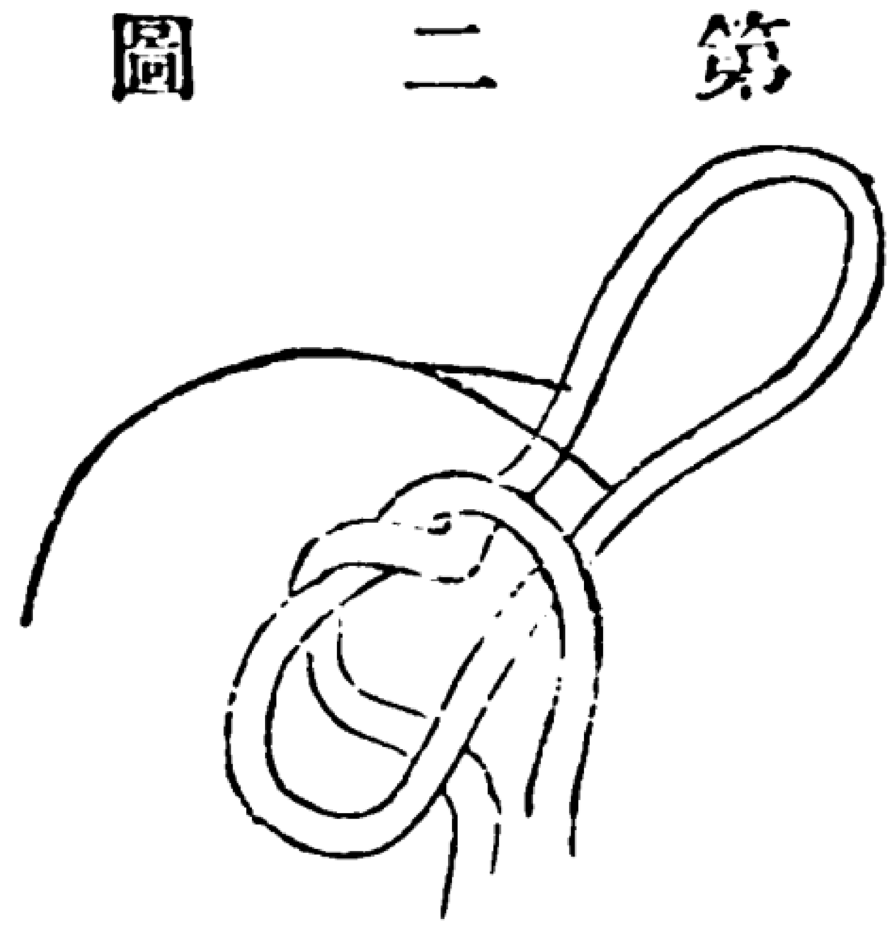
梅結 35

此の結は、元、笛、雨傘等の袋の緒に用ゐ來れり。當世は、婚禮の時媢女の衣裝束袋、並に寶袋其他目出度もの、袋の緒に用ゐてよし。

第一圖

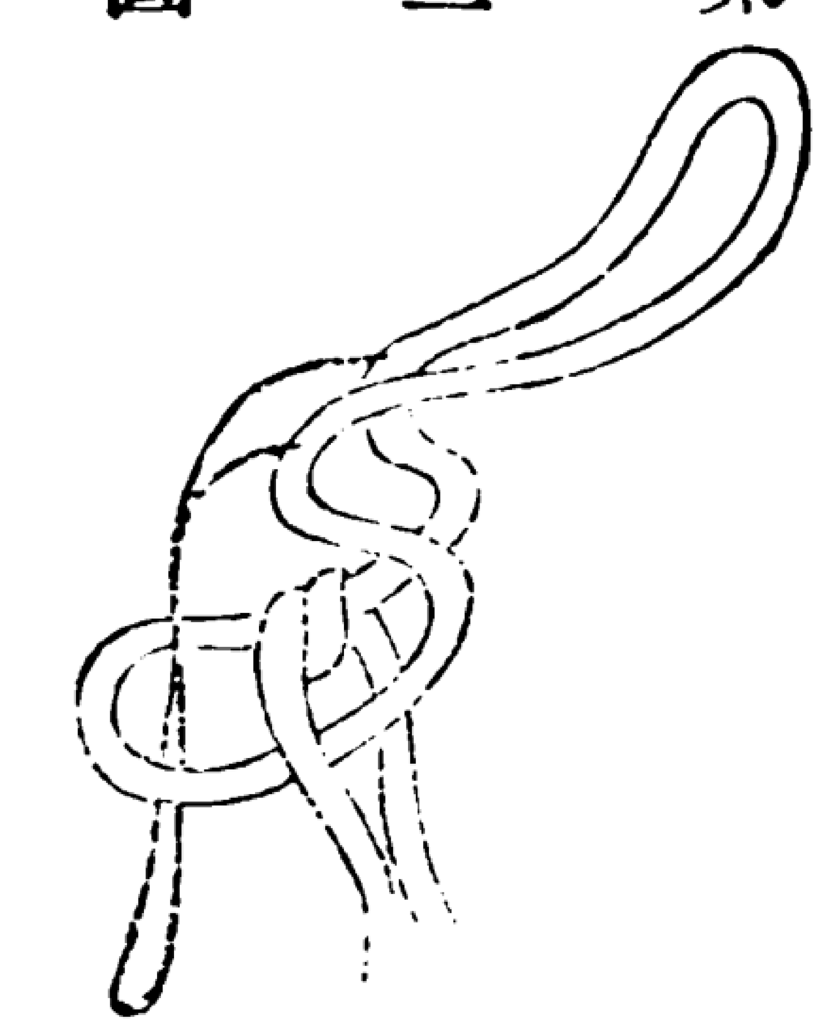


第二圖



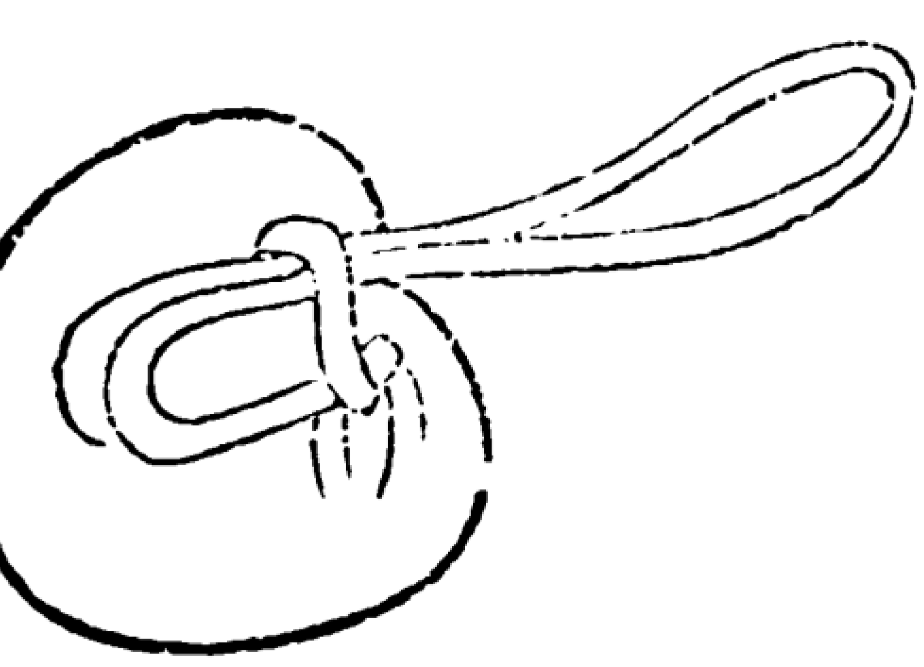
点線にて示す如く引きて第三圖の如くなる

第三圖



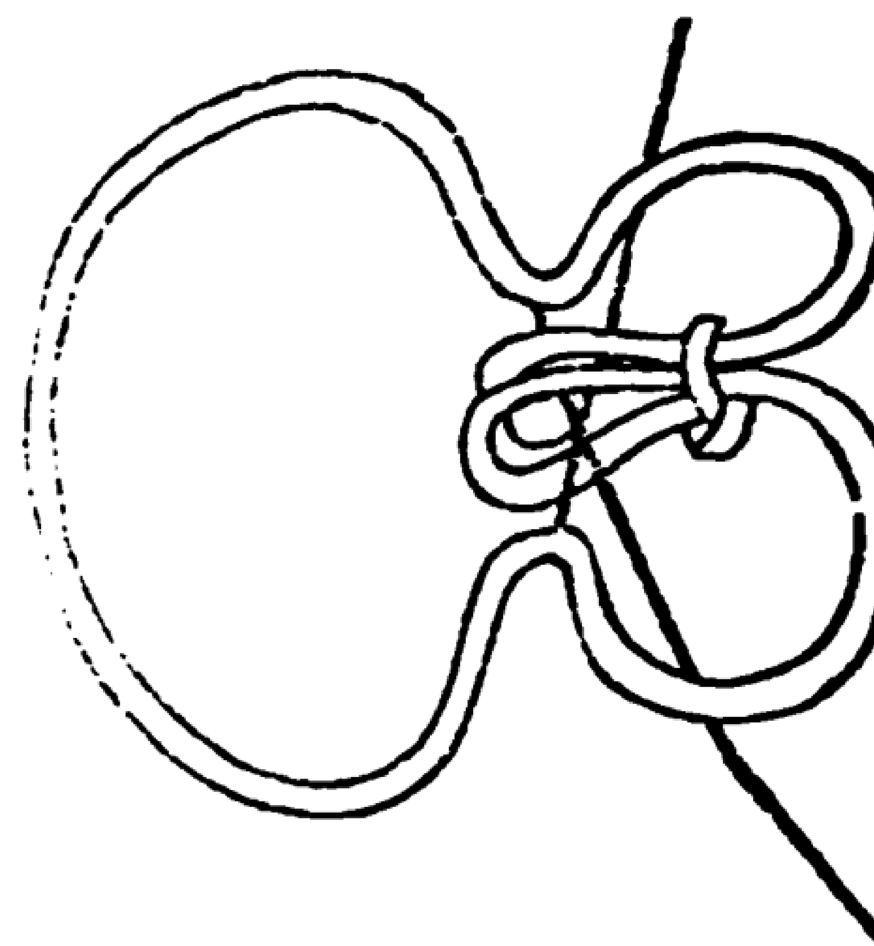
黒線にて示す如くして通て引締め

第四圖



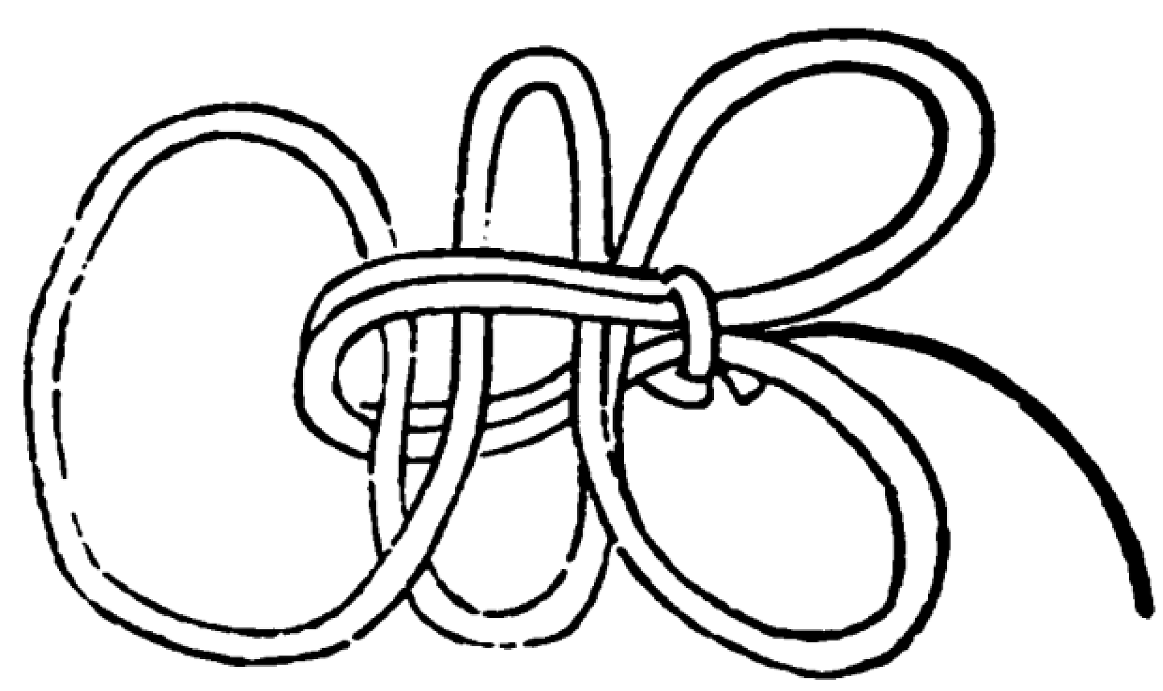
黒線の如く引返して環をなし

第五圖



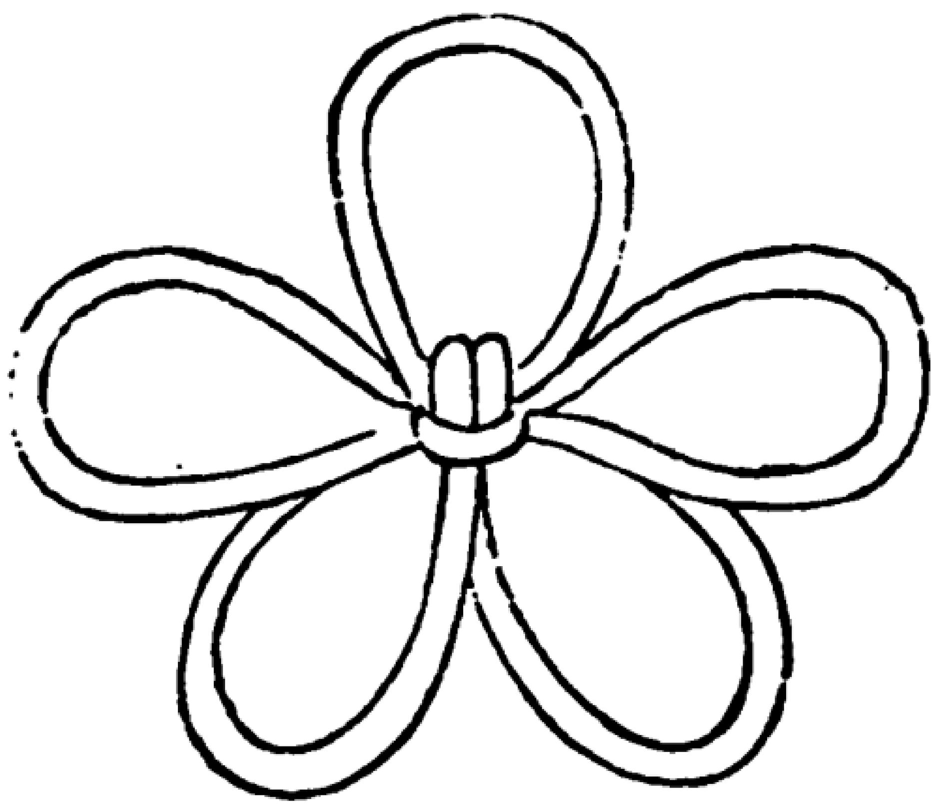
黑線の如く兩方に引通せば第五圖となる

第六圖



点線の處引締むれば第七圖となる

第七圖



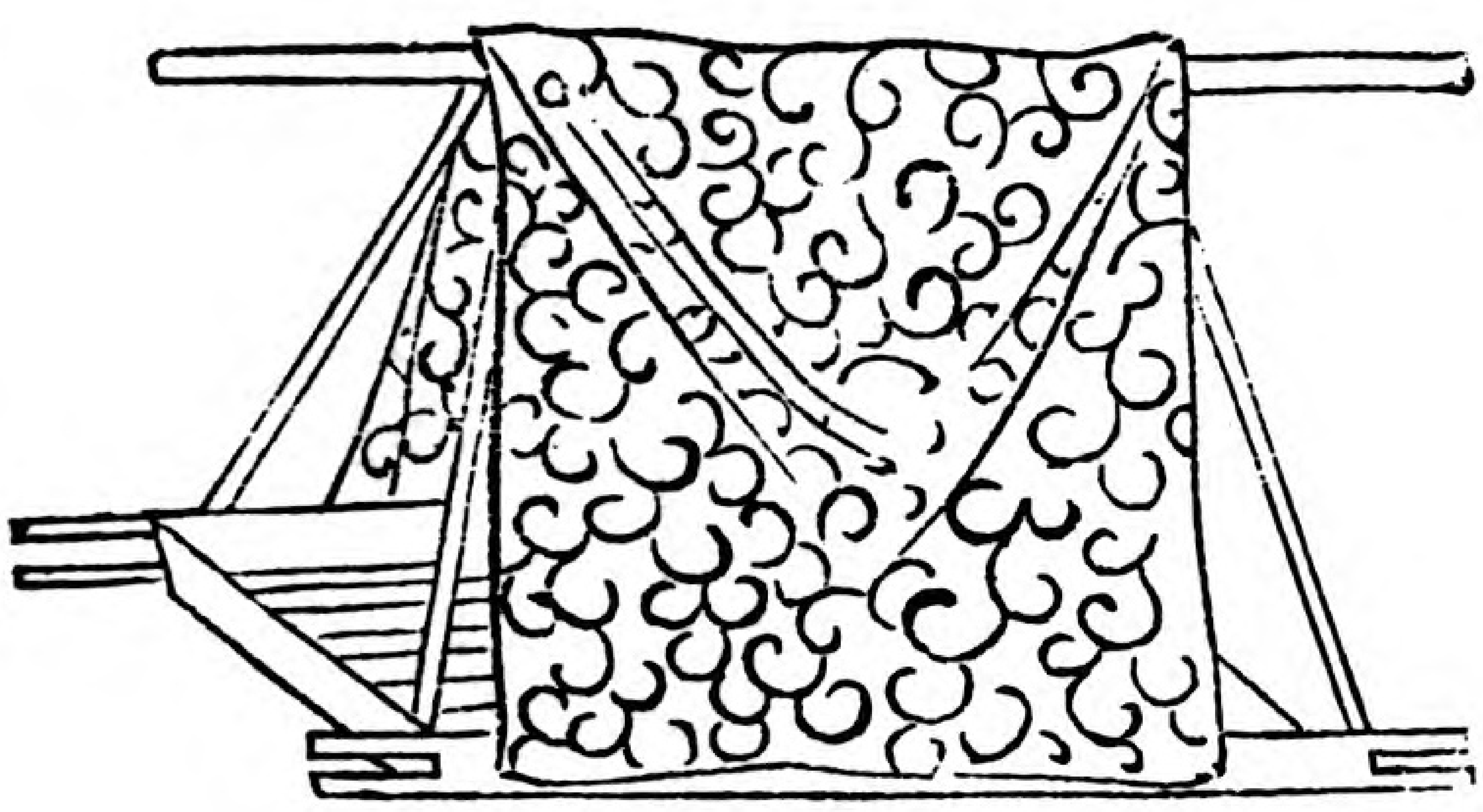
結び上り

たちぬひ

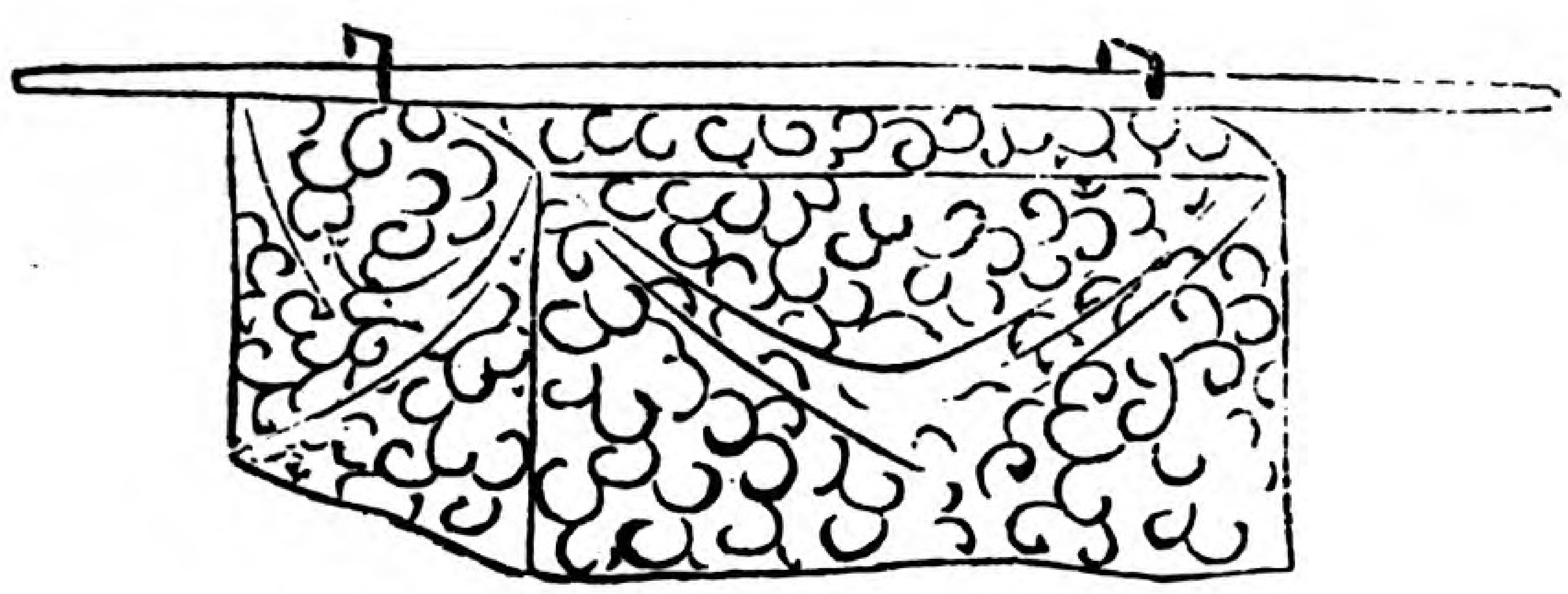
西山たい子

(二百) 油單

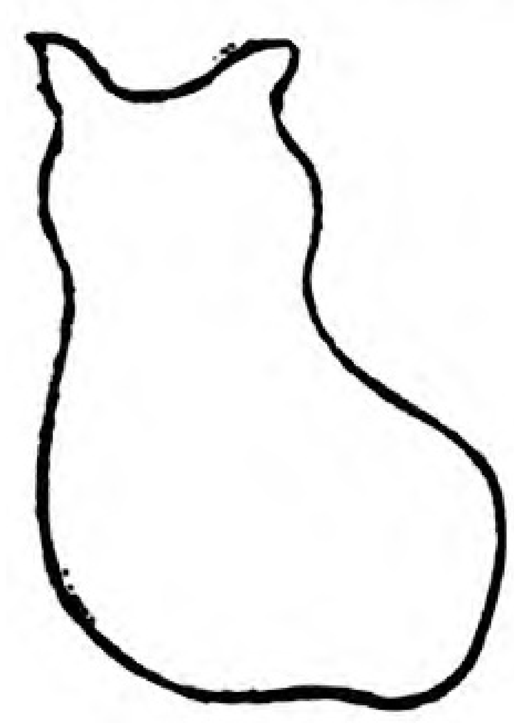
油單は、簞笥、長持、釣臺を被ふものにて、釣臺の油單は、紋のあるものは、よくその紋をひきあはせ、ふろしきの如く布をぬひ合せ、四角にひもをつくれば、よろしきなり。簞笥長持は、其大小をはかり、その器よりは、餘程大きく、長めに袋に仕立て、はめこむなり。まづ簞笥ならば、後より前の長さをはかり、一方を五六寸ばかり、兩方にて一尺二三寸ばかり、長めに三布そろへて裁ち、まづそれをはぎあはせ、横をも、また、簞笥のたけに、二布づゝ、都合四布たち、簞笥の上の鐶を通すべき所を、よき程に明けて、他を袋にぬひ、下を深めにをりて絎るべし。紋のあるものは、紋の違はぬやう注意して、はぎあはすべし。又四方をぬはずにおきて、緋縮緬、赤き唐ちりめんを、太くゝけ、又はうち紐などにて、四角を二ケ所三ケ所づゝ結ぶもあり。之はいとうつくしく見ゆるものなり。長持も簞笥の如く、その大小をはかり、鐶を通す所をあけおきて、袋にぬふか。又は紐にて引き結ぶなり。よろしく圖をみて解すべし。



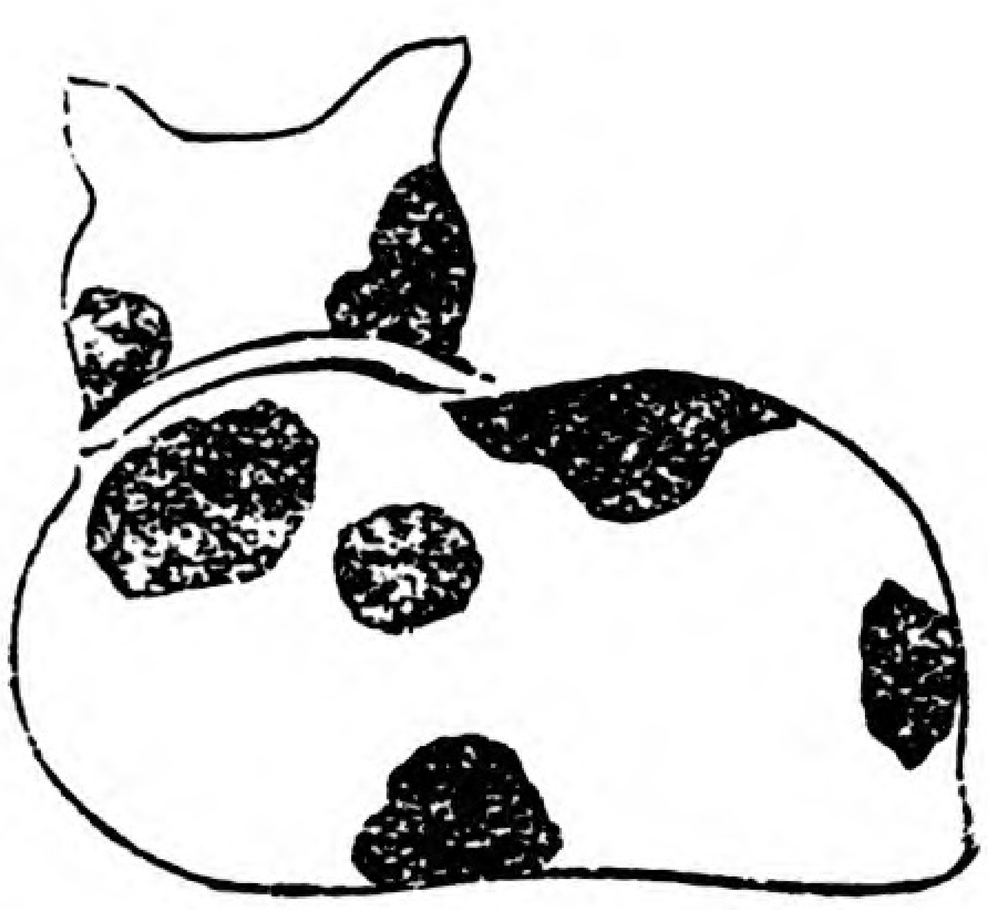




(二百一)　守りぬひ猫



まづかやうの形に厚紙をたち、綿を入れ、白ちりめん、又は、黒きびろうどなどの切にて被ひ、よく形を正して、のりを以てうちにはりつけ、あかき切もて首輪をつくりつけ、裏を千代紙又は、うすき切にてはるべし、又白ちりめんならば、すみにて形をつけ、ぶちにするもよし。



だいどころ

茶椀蒸

昆布の煮汁を製り、竹の子、松たけ、栗、きくらげ、しめぢ、ぎんなん、とりぶ、くわい(季節によりて變る)の類を、能程に味を付置き、ゆでを、擂鉢にてよくすり、薯蕷を、わさびおろしにておろし、又葛粉を水にてとき、少しづゝいれて、よく擂り交せ、昆布の煮汁を、能程に投じ、醤油味淋の煮きり等にて鹽梅し、味付置たる品々を茶椀に投れ、其上より、前の合したる汁を盛り、茗荷、つまみな、みつ葉杯いれて、蒸籠にならべ、蒸すべし。

同　栗にて製する法

栗の皮を剝ぎ、しぶをとり、わさびおろしにて、おろし、薯蕷、葛粉等を、前の如く擂り交せ、昆布煮汁、醤油、味淋等にて鹽梅し、種物を投れ、前同樣にすべし。

摘ぬ麩煮物

生麩を、能程につみ、松露、竹の子、きくらげ杯交せ胡麻油にてあげ、砂糖食鹽にて鹽梅し、丼に盛て用ふ。

あげながし

豆腐を能程にきり、胡麻油にてあげ、あがりたる時、水にうつしいれて、油氣を去り、別に葛湯を沸たゝせ置き、其の中に豆腐を投れ、さつと沸たて、山葵味噌にて用ふ。

青梅を貯る法

青梅を採り、瓶に入、古酒と白砂糖とを、等分にしたるものを、其の中に青梅の見ゑぬ程に投れ、密封しおく時は、いつ迄も風味よく色變ることなし。





漢文學講義（十六）

大林弘一郎

十四、登富嶽記　石川英

英、字は君華、鴻齋と號す。三河の人なり。今、現に東京に住し、詩文を以て世に名あり。又、畫にも巧なり。

その校刻せし所の書は、甚多く、皆世に行はる。

こゝに、掲げたる記文は、明治二十三年の夏のころ、翁が登山せし時の作なり。翁之を繪畫叢誌に投寄せし時のはしがきに曰はく、

「斯の一篇は、本年七月、余甲州に遊び、富嶽に登り、親しく目撃する所を記す。畫家の助けにもならんかと思ひ、茲に載す。」蓋し、富嶽は、甲の吉田口を以て正面とす。物徂徠、田省吾等、詩ありて之を證す。然れども風景は、南都留郡、河口湖の北岸、大石村より望むを以て佳絶とす。倒影湖心に涵して、水中又一富嶽を畫く、余別に記あり。斯篇は吉田口より登るを記するなり。

庚寅季夏。遊甲之郡内。時熇暑爍石。炎威不可堪。門人酒巻知卿。勸登嶽之遊。興意勃然。勝情不可禁。急卜日蹶起。則從吉田村登焉。蓋嶽麓有四道。一從駿河大宮巷。一從須走村。一從新道某村。一從甲斐吉田村。（今改爲福地村）甲人謂。富嶽以甲爲正面。駿人即背矣。余以爲八面玲瓏。固無正背。但東北連山圍繞。若甲高於海面。幾數百丈。而嶽之屬甲者。爲十之六。故謂之正。且物徂徠詩。有欲識士峯眞面目。却從甲斐國中看之句。正背之論。亦可以證焉。」

此の一段に於いて、富士に上る道筋のことより、山の正背の論あることなどを記きたり。

さて、明治庚寅の歳夏の末つかた、翁甲州の郡内に遊べり。この時、暑中なれど、熇きつく如き暑さは、石をも爍きこがす樣にて、炎熱の威力強く、堪へ忍びがたき程なりき。この地なる酒卷氏、字は、知卿は、翁の門人なりしが登山のことを翁にすゝめたり。されど、翁も、登りて見むやとの念、さかりに起りて、勝景を見んとの情、自、禁ずること能はず。因りて、急に日を定めて蹶立つるごとく急ぎ出立ちて、吉田村の方より登りぬ。

蓋、富士に登る道に四つありて、一は駿河の大宮町よりし、一は須走村よりし、一は新道某村よりし、一は甲斐の吉田村よりする道なり。（吉田村は今改て福地瑞穗二村と爲す）甲州の人は、富士は甲州より見るが正面にて、駿州は背面なりといへり。されど、余は以爲らく、八面玲瓏として玉の如く淸きこの山に、固より正面背西の區別あるべからず。但東北の方は連山圍み繞りて、甲州にては海面より高きこと幾數百丈、而して、この山の十分の六は甲斐に屬したる故に、之を正面といひしならんと、且物徂徠（荻生雙松）の詩にも「士峯の眞面目を識らんと欲せば、却りて甲斐國中より看よ」といへる句もあれど正面背面の論も、之を以て證すべきなり。

按ふに、正背の論は、果して、いつれを正ともし難けれども甲斐より見たる景色は、頗美なりといへることは嘗て聞きしことあり。たゞ、東海道より見る人最多く、甲州よりは見たる人少きが故に、廣く世に知られざりしならんか。

余幸在於甲。距嶽僅數里。初投巫覡某家。借登陟之具。簑笠草鞋。着邪幅。携木杖。使導者負緼袍與行厨。是日霰雨至霽。酷熱如焚。路傍靑草。薫蒸撲鼻。行二里半。無一樹遮日。抵駒廻。入茶店。憩焉自是車馬不

得レ陟。路亦峻。松杉蓊蔚。白晝冥然。土人分二山程一爲二十級一。級謂二之合一。或作レ劫。姑從二俗稱一。此處則爲二一合一也。

この一節には、登山せんとせし時の有樣を述べたり。われ幸に、甲州に來り、富士をへだつること僅に數里の地に在りて、初は巫祝、(即、祠官又は行者、先達など)の家に投宿し、登山の裝束をかり、管笠を蒙り、草鞋をつけ、邪幅は、行縢のことにて、きやはんなり。(詩經に見えたり)行縢をつけ、木の杖即金剛杖を手にし、合力をやとひ、之に行厨と、寒さをふせく時の縕袍とを荷はしめて案内せしめたり。是の日、纖雨、即、小雨なりしが、全く霽れて、熱氣酷しく焚くが如く、路傍の青草は、日に蒸されて、草のむれたる香は鼻をつくむありに甚しかりき。この間を行くこと、二里半むかり、日光を遮るべき木一本だになかりしは實に苦しかりきといふ意を含めり。さて、駒廻といふ處にいたり、茶店を見付けたれど、こゝに入りて休憩せり。この所よりは、路さかしくなれる故に、車馬にては陟ることかなひ難く、路には松杉など、蓊蔚として生ひ茂り、白晝にも、冥然としてうす暗きまで、茂り合ひたり。

この地方の人は、山程を十段に分ちて、一段、即一級ごとに合ともいひ、或は劫ともいへり。今、之を記するにも、姑く俗稱のまゝに從ひて合といふなり。

さて、此處は、その一合目なりといへるなり。是より、進みて、次第に、その景を叙せんとする爲に、山の十合に分ちあることをも、こゝに注したるなるべし。

毎合有二屋舍一。鬻二茶菓杖鞋一。以爲二休憩之處一。至二三四合一。樹木矮小。屈曲黏レ地。悉爲二怪狀一。漸抵二半腹一。土皆赭黑。石若二鐵滓一。犖确錯互。殆欲レ無レ路。而樹木既盡。叢條裁生。童然無二遮レ眼者一。忽有二一片如レ綿者一。縷々焉。出二於深壑之中一。斜横二山腹一。初如レ舒レ練。又如レ張レ幔。或

如龍蟠。或如虎蹲。如怒如戯。徐々望我而來。余愕然。竊想古人以雲爲無心。今也若有意進我前途。果然何以得進歩。暫待其變化。入路傍石室避焉。相隔僅數武。俄然如山嶽崩頽。如濤瀾洶湧。倏忽之間。屋舍人物。盡爲天絮所罩。至若山雨霎々。咫尺叵辨。冥漠之中。唯聞人聲與鈴聲而已。

この一節には、山のさまと、途中に雲の起れる時の有様を叙したるなり。

毎合に、皆茶屋ありて、之をむろといふ。こゝにて、茶菓杖鞋などを賣り、旅客の休憩に便せり。この屋舍にて、宿泊をもなすべし。その距離は、凡、一里許なりといへり。さて、三合目四合目に至れど、山に生ひたる樹木は、皆小く、たけ短く、屈曲して、地につき、悉、あやしき様をなせり。漸、山の半腹の程まで上れど、土は皆赭く黒き色をなし、石は、鐵の燒けたる滓のごとく、山一面に、犖确として、ゴタ／＼としきつめたる如く、錯互し入り交りたれど、路も、殆、なきやうに思はる。(山石の累々たる貌を犖确といふなり。)さて、このあたりよりして、樹木は、もはやなくなりて、たゞ小笹の如きもののみ生ひ立ちて、裁に地面をおほへるなり。されど、山は、童然として、(草木なきはげ山を童といふ。)全くはげ山にて、眼をさへぎるべきもののあることなし。かゝる所に、忽にして、綿の如きもの一片あらはれたるが、縷々焉として、いとすぢの如くたえずつゞきて、深き壑の中より出で來りて、斜に山腹に横はれり。これ、即雲の起りたるなり。その貌、初のほどは、練絹をのべたるが如く、又、幔幕を張れるが如く見えしが、或は龍の蟠れるが如くに變じ、或は虎の蹲れるが如くに化し、また怒れるが如くも見え、戯れるが如くも見え、徐々として、我が方を望みて來れり。余之をみて愕然として驚き、心のうちに、ひそかに思ふやう「古人は雲をもて、心なきものとなせども、

今かゝる有さまを見るときは、何となう、意ありて、我が行く前を、遮り塞がんとするがごとくに思はるるなり。果して意あるものならむ、何とて歩を進め得べき」。と。因りてしばらく止りて、その變化するを待たんとて、路の傍なる石室に入りて、之を避けたりきと、ことさらに、興味あるやうに、詞を工にあやなしたるなり。さて、見れど、相隔つること、僅に數武、即、數歩の所にて、雲の形、俄に變りて、山岳の崩れたるが如く、また荒濤の湧立ちたるが如くなりて、忽にして、尾舍も、人物も、ことごとく、天架即雲のこめ掩ふ所となりぬ。しかのみならず、山雨さへ霎々とふり來りて八寸が尺の前も見えわかぬまでかきくもりたり。霎は小雨にて、霎々と重ぬるときは、雨の降る聲をいふなり。叵は、音は頗、不可の義なり。即、可の反對の字なり。故にベカラズ。カタンなど譯すべきなり。さて、かく、雲雨に掩はれたれど、冥漠として、くらくくもれる中に、唯、人の聲と鈴の聲とのみ聞ゆるなり。鈴は、行者の携帶する所なり。

少焉雲霽雨收。冷氣漸加。相與鼓勇而躋。已過六合。眼無青物。寒氣逼肌。汗珠已收。毛孔盡起。乃重緼袍。纏領巾。進抵八合。寒益冽路益險。回首眺望遠邇。諸山失形。環拱起伏。如翠浪相漲爾。揚子所謂。升東嶽而知衆山岣嶁。眞然矣。但恨西北白雲羅曬。如地上敷綿。若彼越之立山。賀之白山。不相覩其頂也。

この一節には、一轉して、冷氣を覺えたること、並に、山下を見たるありさまをのべたり。

少焉は、暫時の間なり。かくて、雲もはれ雨もやみたれど、次第に、冷氣を増し來れり。同行のものもろともに、勇氣をふり起して登り行き、六合目を過ぎし程は、山は、一面に燒け石のみにて、一本の青草も眼に見ゆるなし。このあたりよりは、寒氣一層

強くなりて、肌を透すやうに覺え、さきには、汗も出でたれど、いつとなく收まり、毛の根の起つやうになりぬ。されど、こゝにて、縕袍（綿の入りたる上衣、ドテラの類を云ふ）を上に重ねきて襟巻を頸にまとひ、防寒の用意をなして、進みて八合目に至れど、寒氣は、益、きびしく、路は、益、險しくなれり。このあたりより、首を回して、遠近（邇は近に同じ）の景色を眺めわたせど、多くの山々は、皆、上より見下すゆゑ、形も見えがたく、すべて、環り連りて起伏し、靑波のうちよするが如くに見えたり。むかし支那の前漢の揚雄、（字は子雲、後人揚子といふ。揚子法言を著す。文章に巧なり。王莽の時の人なり。）が法言の中にいへる、「東嶽を觀て、衆山の峛㠧たるを知れり」との語は眞に然り。揚子の本文は升の字を觀の字に作れり、こゝに升とかけるは、ことさらにかへたるか。又は、誤れるか。知り難し。峛㠧は、邐迤と同じく、山の卑く長くうちつゞける狀をいふなり。

たゞ恨むべきことは、西北の方は、白雲の羃䍥として、覆ひ罩むるが故に、地上に綿を敷きたるが如くなれど、彼の越中の立山、加賀の白山などの高山をも、その頂を觀ることを、得ざりきとなり。

（以下次號）

源氏物語講義（廿六）

下田義天類

若き人々、かなしきことはさらにもいはず。内わたりを朝夕にならひて、いとさう〴〵しく、うへの御ありさまなどおもひいて聞ゆれど、とくまゐり給はむ事をそゝのかし聞ゆれど、かくいま〳〵しき身のそひたてまつらむも、いと人ぎゝうかるべし。またみたてまつらでしはしもあらむは、いとうしろめたう思ひ聞え給ひて、すが〳〵ともえまゐらせたてまつりたまはぬ也

けり、

此の條も、猶彼の靭負の命婦が立ち歸りし後の餘波にて、即、二條里亭の女中衆の有様と、母北の方の此の程の心中とを、書きあらはしたるところなり。

○若き人々　は二條の里亭に伺候する所の、若き女官方の面々なり。　桐壺の更衣、及、若君の御側に付添へ置せられたる、女官の方々の、若き衆などはなり。

○かなしき事はさらにもいはず　とは、此の二條のさと方にありて故息所の御事と、常に思ひつゝけむ事のかなしき事は、今改めて作者が言ひたつるまでもなきことなりとなり。即若き女官の方々などが、かくの如くに、見るもの聞くものにつけて、心細き此の二條の里方に、かくて永く引き籠り居らむことのかなしき事は、勿論のことにて、今更めていふまでもなきことなりとなり。

○内わたりを朝夕にならひて、　とは、年老いたる女中だちも、　禁裏邊の賑はゝしき生活を、朝夕に見習ひて、夫を平生の事と思染みたる人々の事なれど、此の二條の里の假ずまひを、いとさう／＼しく思ふのにといへるなり。さうざうしくは寂々しくにてさびしき事也。

○うへの御ありさまなどおもひいて聞ゆれど、とは陛下の御上の事などをも、御なつかしく、且は御いとほしく思ひ出し奉れどなり。うへは　陛下の御上をさしたるにて、聞ゆれどは、奉れどといふ程の敬語なり。

○とくまゐり給はむ事をそゝのかし聞ゆれど、とは、若宮の早く禁裏へ御參內あらせられむ事を、若きも、年老いたるも、皆一やうに、慫慂し奉れどもの義なり。若宮の禁裏へ歸らせ給はむには、此の女官の方方も、共に宮中へ戻ることを得可けれど、それとは云はずして、若宮のとくまゐり給はむことを、母北の方の御前へそゝのかし奉る由也。

以上は、二條の里亭に伺候せる所の、女中衆のありさまなり。

○かくいまし〳〵しき身のそひ奉らむも云々

是よりは、母北の方の心情を寫せるなり。女官の方方は、右に云へるが如く、若宮樣の御還りを、頻に御勸め申上げ奉れども、母北の方樣には、其の御決心に苦しみ給ふ由なり。さるは、若君には、出世前の御身柄にて、行く末の縁起を祝ふべき所なるに、母北の方樣は、是まで甚不思合せなることのみ。打續きたる御身にて、早くより故大納言殿には、死別れ、其の上、御娘子の桐壺の更衣にも先だゝれ、尼法師にさへ、姿を更へて、今はかく不遇の淵に沈み居る御身柄なれど、甚以ちて、忌み嫌はるべき御身也。かくいまし〳〵しき御身を以ちて、此の前途多望なる若宮の、御身邊に附添ひ奉らむことは、縁起のわろきのみならず、第一、外聞もよろしからざるべし。さりとて、手放し奉りて、若宮のみを、禁裏へ差し上くる事とすれども、かく朝夕に見奉ることも、叶ひ難かるべし。しか見奉らで、ただしもあらむは、いとうしろめたく、不安心なるべしと、とざまかうざまに思ひ聞え給ひて、決心に苦しみ給へるよしなり。

○すが〳〵ともえまゐらせ奉り給はぬなりけり。すがすがとは、ハキ〳〵となり○えまゐらせ奉り給はぬは、若君を禁裏へ參らせ給はぬ也。

さて若君參内の事につきては、是まで、度々陛下より御申開けのあらせられたる事なれども、夫にも拘はらず。かく二條の里亭に、いつまでも、留め置き給へる故に、そのいつまでも留め置き給へる理由を、作者の詞を以ちて、此の末段にことわりたるものなり○え參らせ奉り給はぬなりけりとは、頗回遠き云ひまはしのやうなれども、こゝはかくいはでは叶はぬ所也、これを兩おげのこと葉といふ。作者が、自己の言葉 さしはさみて、主客の双方を

あげ、これに敬語を用ゐたる法なり。參らせは朝廷を崇めたる詞。奉りは若君を崇めたる詞。給はぬは母北の方を崇めたる詞也。かゝる敬語の用ゐ方をも、一わたりは心得おくべし。

以上を概括して云へは、此の二條の里亭に、伺候して居る女官だちも、其の若き人々などは、かゝる露けき中に、明し暮らせど、夫をかなしく思ふは、勿論の事にて、今更めていひたつるまでもあらず。年老いたる人々も平生禁裏わたりの、今めかしく、賑はゝしき生活を、朝夕に見習ひたる人々なれど、此の二條のさとにて、八重葎にさしこめられて在らむことは、いとさうざうしく、ものさびしきことに思ふのに、又、かてて加へて萬事御仁愛に渡らせらるゝ陛下の御ありさまの、御なづかしく、御いとをしく、思ひ出し奉らるれど、老いたるも若きも、皆一樣に、一日も速く、宮中に立戻らむ事を願ひて、若君の、とく宮中へ參り給はむ事を、母北方へも、御すゝめ申上奉れども、母北方には、御自身の不仕合なるすぐせを御遠慮成されて、かくいま〳〵しき身の、そひ奉らむは、行末の緣起もよろしからざるべし。若君は、我が娘の御服なり。殊に御誕生の當時より、手しほにかけて、御養育申上げたる御間なれど、御見ゆるしもあるべし。陛下にも、是まで度々參内をうながさせ給ひし御事なれど、附添ひ奉りたりとて、御咎もあらざるべし。されども、第一は、世間體、即、人ぎゝがうかるべし。さりとて、又、若君御一所をのみ手放し奉りて、宮中へ差し上げむも、いかゞあらむ。第一は、見奉らで暫時もあらむ事は、甚うしろめたく、氣遣はしき事なるべしなど、若君の御上を御案じ申上げて、とざまかうざまの心づかひに、これまでハキハキとも御參内をせさせ奉り給はざりし譯柄なりけりと云へるなり。これは、前數回の間に說き明したる、母北方と、靱負の命婦との、應對の事を記し畢へて、俄然として筆を擱かむことの敢なければ、暫時その餘韻を留めむとて、書き添へたる、

所謂、殘餘の波動なり。さて此の殘餘の波動によりて、暫時讀者の感動を鎭靜し、平々凡々の間、おのづから讀者の目前を變換し、さて後段に於きて新にまた一波瀾を起し、澎湃たる狂瀾、天を摩し、空に漲らむとする一活動を演し出すべき、用意としたるものなり。ダンマリの幕。決して無言の演戲にあらず。以ちて此の文章の妙所を察すべし。

布美安波勢（八）

白松園主人

六月　人の家にはちすあり

左　持　尚文

市路は、わづか中垣ひとへへだてたれど、いたうひなめきたる田居に、家つくりて友だちのすめるをとむらひたるに、さうじみなあけはなち、いよすかけわたして、あるじははしのすのこのうへに、あふぎ手ならしつゝゐたり。いたうよろこびてさしむかひて、さしむかひ物語す。家居のさま、なつをむねとして、庭のかぎり池になし、はちすをしみゝに、うゑなべたりけり。花はこきうすき、所せう咲きて、すゞしく吹きくる風にたぐへて、打にほひくるは、この世のうちともおもはれず。かくしづかに住めるあるじの心よ、はちすのにごりに、しまぬにもにたるめり。

右　重豐

池のはちすは、くきながうしろきに、くれなゐに花咲きまじりつゝ、いともおもしろき水のおもてなり。そのみなぎはにさしつげたる樓のうへこそ、なつはすゞしきかぎりなりけれ。たち葉の露を、ふきこぼしたる風のなごりは、かうらんのうへにかよひきて、ふうれいといへる鈴のおと、軒むにりん〱と。

評判　左右の文、ともにおもしろし。もちとす。

左勝　清風

廿日の月はなやかにさしいでゝ、しめやかなる夜のさまなりけり。われのみまさる草のいほりに、やり水のおとなど心ぼそく聞えけれど、こは誰人のすみかならんとかいま見れど、庭には八重葎の生ひしげりて、ふみわけたる道もなく、そこはかとなき虫のこゑ〲も、はたあはれなり。こなたの池を見わたせど、蓮の立葉にゐる露の、月の光にあひて、かゞやく玉とぞあざむかれける。花はいとしろうて、にほひことにきよらなり。にごりにしまぬるあるじの心は、いかにすが〲しからんと、みすぐしがたうなん。

右　　徳

あつさのたへがたきに、すゞみせんとて、川づらにそひてものするに、つくりざまよのつねならず、をかしげなる家のありける所にいたりぬ。池のおもておしなべて、はちすの花のさかりなるに、立まじりたるたち葉の露の、風にちりきて、袖もしとゞに打ぬらせるは、いときよく、すゞしきものになむ。

評判　左の文、ちからいれたりと見えて、おもしろし。右の文は、一わたりよろしげに見ゆれど、よくおもへど、蓮のたち葉の露の、風にちりきて袖ぬらすらんこと、さやうにあるべしとはおもはれず。

左　　保世

あつさわすれんには、水のほとりこそよけれと、何がしの院の、池の蓮を見むやと、すげの小笠をかぶりて、からうじて行きけるに、あるじの僧はいまさねど、をさなきはふしにゐないさせて、池にのぞきたるかうらんてより。みるに、石のたゝずまひ、水のながれ、をかしうしなして、蓮のうきはのひろごりて、花は白たへにて、水より出て水よりすゞしきに、けふのあつさのくるしさもやみて、この世の外とぞおもはるゝといふを、かたはらにかの法師のゐたるが、蓮は妙法蓮華のたとへに、佛ものたまひて、往生極樂の縁とすれど、さもありぬべしと、こたへたるはいとをかし。

右勝　祝之

つきぐしう住つきたるすまひに、ましてなつのかたにこのましう、むねとかまへたりと見えて、庭は大かたに、ひろき池となしつゝ、かきつ田の流にかよはせたれど、風もいとよく吹きかよはせり。さむりかなるいけの、池もせに生立る蓮の花に葉に、さかりなるころは、せきいれたる水のおもてかくろひたるも、中々けはひすゞしうなん。

評判　左の文、おもしろくはかけるものから、きずありて見ゆ。右の文は、ことすくなによくかきえたり。かちとすべし。たゞしさはりかなるといふ調は、いにしへも今もみえず、聞えぬことどもなれど、かむかりの文かく人の、さやうのあやまりあるべしとはおぼえず。こは此冊子にうつせし人の、あやまりにて、つくりぬしは、さむかりなるとぞかきつらん。



教梯抄（續）

千載集離別

有國大貳になりてくだりける時よみ侍りける

前大納言公任

わかれよりまさりて惜しきいのちかな
きみにふたゝびあはむとおもへば

同　同　藤原定家

別れてもこゝろへだつなたびごろも
いくへかさなる山路なりとも

同　羇旅

心の外なることわりてしらぬ國に
侍りけるときよめる
　　　　　　　　　平康頼法名性昭

さつまがたおきの小島にわれありと
　　親にはつげよ八重のしほかぜ

新勅撰集旅
　都をはなれて所々にまうでめぐり
　侍りける頃よみ侍りける
　　　　　　　　　八條院高倉

しらくもの八重たつ山をたづぬとも
　　まことの道はなほやまよはむ

（續後撰集か）
　　三百首の歌の中に都どりを
太上天皇

みやこ鳥なにごとゝはむおもふこと
　　ありやなしやはこゝろこそ知れ

續千載集羇旅
　雪中旅行といふ事をよませ給ひける
今上御製　後宇多院

ゆきのうちにむかしの道をたづぬれば
　　まよはぬこまの跡ぞしらるゝ

戀　二十七首

拾遺集戀
　天暦御歌合
　　　　　　　　　平兼盛

しのぶれど色に出にけりわがこひは
　　ものやおもふと人のとふまで

千載集戀一
　題しらず
　　　　　　　　　輔仁親王

いかにせむおもひを人にそめながら
　　色にいでじとしのぶこゝろを

同

同
歌合し侍りける時忍戀の心をよめる

刑部卿頼輔

こひ死なむよのはかなさにいひおきて
無きあとまでも人にしらせじ

続千載集戀一
題しらず

藤原重顕

しられじと思ふこゝろやなか／＼に
人のとがむるいろに出づらむ

後撰集戀二
女のもとに初てつかはしける

壬生忠峯

ひとりのみおもふはくるしいかにして
おなじこゝろの人ををしへむ

同

同
人のいひわづらひて平定文がもとより
何事を今はたのまむちはやふる神もたす
けぬわが身なりけりとありしかばかへし

ちはやふる神もみゝこそなれぬらし
さま／＼いのる年も經ぬれば

れはつふね　在原棟梁女

金葉集戀上
寄花戀の心をよめる

攝政左大臣

あだなりし人のこゝろにくらぶれば
花もときはのものとこそ見れ

同
戀下
人をうらみてよめる

盛經母

さのみやはわが身のうきになしはてゝ
人のつらさを恨みざるべき

新古今集戀二
片おもひのこゝろをよめる

皇太后宮大夫俊成

うき身をぞ我だにいとふいとへたゞ

そをだにおなじこゝろと思はむ

（未完）

皇國左右尊卑の説

井上頼圀

おなじひとつの席にても、上下の差別ある如く、左右二つの方につきていはゞ、亦孰れを尊しとし、孰れを卑しとする區別はあるなり。この事は、瑣末のやうなれども、上はおほやけの典故にも關係し、下は俗間の禮式などにも關係せれど、今その沿革を繹ねて、皇國にては、左右孰れを尊べるかの概略を左に述ぶべし。

抑、我が國にては、左右孰れを尊べるかといふに、その事は、夙く神代の大古に見えて、伊邪那岐、伊邪那美の二神、天之御柱を廻りて、國土を經營し給ふとき、初は男神右の方より廻り、女神左の方より廻り給へるに、良しからず。後改めて、男神は左より、女神は右より廻り直し給ひて、みの功を成初め給ひき。この事につきては、先哲の説も數おほかる中に、平田篤胤翁は、左は男の位にて、奥なり、上なり、本なり、右は、女の位にて邊なり、下なり、末なり、男神は左上に成坐し、女神は、右下に成坐して、是ぞ天地初發の時より、男は本にて、尊く、女は末にて卑き義理の初なりと曰はれたり。この風は、後世までも傳りて、中古唐風の入來れる時すら、改められず。これにつきて支那の風を按ふるに、彼の國にては、時代によりて、多少の變遷あり。强ち一様ならざるに、似たれど、おほかたは、右の方を尊しとして、左の方を卑しとしたるなり。その例の二三を言はゞ、漢書蕭何傳の註に、右猶上也と見え、詩の雝の章中、右字を釋したるには、右猶尊也とあり。人の優れたるを稱して、無出於其右者などの語は、常に見る所なり。然らば左の方は如何といふに、邪道を左道といひ、不正の官を左官といひ、國語には、是左之也とありて、註に、左疎

外也と見えたり。戰國策に、衍將右㆑韓而左㆑魏、註に左僻也とあり。後漢書、光武帝紀の註には、左卑也と見ゆ。その他、左猶㆑下也とも、左物は下物也など、或は左不正也とも見えて、今數へかたし。

さて、支那にては、かく左を卑しとし、右を尊しとしたるに拘らず。我か國にては、中古彼の國の制度風俗を摸倣せられたるにも、彼の風を取らずして、飽くまで。我が古風に從ひて、改められざりしは、最めでたきことなり。そは、彼の令の官制を見ても知らるゝことにて、左右大臣は、左大臣を上とし、右大臣を下とし、辨官も、左大辨は上にして、右大辨は次なり。その他、兵衞、衞門、馬寮、兵庫等左右に分れたるもの、皆左を以て上とし、右を以て、次とせざるはなく、延喜式等に定められたるも、皆同じ、されど、何れの事にも、左を尊びて、右を卑み、御神樂次第にも、左を本方とし、右を末方とし、神座などは、取りわけ左を上とし、右を下とすることゝなりしなり。この風また、禮式などにも及びて、左は總べて尊き方に用ひられ、右は、總べて卑しき方に用ひらるゝに至りしも、亦、皇國の正しき古の風なり。此は極めて蕪雜にして、且つ、概略に過ぐれども、いさゝか、そが出來を述べしなり。

主從心得草（續）

諏訪忠元

奉公人に三ッの不思議ある事

越後屋、白木屋伊豆藏の類、店番頭迄勤めぬけれど、八百兩宛の元手金定り也。兩替町、傳馬町向の大店は、大方三百兩くらゐ也。夫より以下の大店、質屋、兩替屋の類は、百兩、五十兩、三十兩、二十兩、其家々の格式也。是を見れど、同し奉公にて、大なる高下のあるやうに見ゆれ共、是が天道直成所也。右八百兩の元手を貰ひし者共は、成程、初めの內は、花々敷、店拵出しけれ共、大家の風儀が、自然とうさらず、萬事大

あらまにして、其上大金を貰ひし事なれど、最早大願成就といふ所になつて、萬事油斷が出來て、次第〳〵に身上まはり、いつしか店をも仕舞、ちひさく格子作り抔にして、本店へ見舞奉公と號て、再び主人の厄介となる者多し。又拾兩貳拾兩の細元手の者共は、油斷してはいけぬ故に、一心不亂とかせぎに精をいれ、少しも奢る心なき故に、次第〳〵に身上よくなつて、子孫も繁昌し、出店に出店を増は、皆此拾兩貳拾兩の細元手の者の末也。其譯は、貳拾兩、三拾兩より取付た身上は、一萬兩の分限になる事は、成安き道理也。あまりしつかりさあたらぬ道理也　八百兩の元手にては、三千兩の身上には、なりがたき者也。其譯は、あたまから、八百兩の心持故に、萬事八百兩の風が吹き、八百兩の氣がある故に、隨分とよくゆいた所が、一年に、貳拾兩か、參拾兩くらゐのびるか、つく〳〵一ぱいならでは行ぬ者也。又貳拾兩くらゐの細元手の者は、百兩になつても、やはり貳拾兩の心持がはなれず、義理其外も、貳拾兩の格にて暮す故、段々と金銀がのびる也。又千兩になつても、百兩位の格にて暮す故に、忽ち金が金を産んで、五千兩、一萬兩の身上になる事はなり易し。世間を見てしるべし。大店より別れたる店に、段々と大きくなるは希也。大方は、段々とすぼまる者多し。股引わらんぢにて、かせぎ出したる身上は、次第に榮る者也。二ツには、越後屋抔は、向ふ店ともに、年季奉公人計四百人餘あり。夫が次第に役ぬけして、番頭になる、番頭を三年勤めて、退役する事也。此勘定では、今參の者は、千四百四拾年目でなくては、番頭に迄ぬける事は出來ぬ也、爾れ共、右の內から、年々、どら打、病氣、病死抔にて、三四十人宛、そつが出來て、其跡へ、年年順ぐりになる故に、三十七八歲にて、番頭にぬける者多し。是は運の强いと弱いとによる事也。右四百餘人、皆、番頭までぬける氣にて、勤めるけれ共、後にはどらを打ち、病身に抔なつて、運のよわき人あり。此運のよわいつよいは、前世の因緣也。又は不養生に

して、煩ひ、病死する者も多し。是等は、求めて不仕合となる人也、唯、主人大事と、一心にかせぐ人は、祈らずとても、佛神の御守りありて、運つよかるべし。大方は不奉公にて、身持惡敷、定命迄生延る人は希也。大方は半壽にて、死する者多し。たとへば、主人より三十俵貳人扶持にて、正月より大晦日迄、暮し方の出來るやうに、宛行ひ置給ふ也。是則ち定命と同じ事也。其積りを以てくらしなば、寒からず、空服からず、年中暮すけれ共、不相應のたどりをして、酒をのみ、女郎を買抔せば、盆前の内に、一年中の宛行ひを、遣ひなくして、盆後より、大晦日迄の暮しは、何を以てせん、飢死するより外あるべからず。是不養生にて、死するに同じ、殘念なる事也。何事も、約束づく抔と申す者あり。甚了間違ひ、生悟りにして、小人島の巾着ほどの智惠也。取にたらず。何事も約束づくなら、誰一人精出して、稼ぐ者はあるべからず。約束づくならば、はたらかず共、さづかりたる金は、天からでも降

そうな者也。然るに、三年待つも、一文もふらぬは、さづかりといふ事なし。かせげば富、なまければ貧になる事、眼前也。爾らば、主に忠を盡し、親に孝を盡し、禮義正敷、身を愼み、家業を出精せば、天より福德を與へ給ふ事疑ひなし。皆々、忠義孝行を致し、家業を出精して、誰惜まぬ、天の福德を得給ふべし。兎角忠義孝行の心さへあれば、一生不自由はなき者也。又一旦信を失ひて、不忠不義なる時は、いかほど信を用ひても、息引取た跡にて、人參を用ゆるにひとし。迚も取かへしは出來ぬ者也。此時に至つて、後悔すれ共詮なし。此用心ありて、信力を出して、大切に奉公を致すべし。又落ぶれても、信あれば、人のあはれみも深き故に、同じ貧乏しながらも、大きに凌ぎ安き場あり。是を後悔の信といふ。以前の不奉公を、漸くと思ひしつて、忠義、孝行の心を起す者也。世間に後悔の信多し。三ツには、四百人の中にて、首尾能く奉公を勤め上て、店持家持となる人は、漸々四五人也。其外の三

百九十五人は、いづれへ行しや、知れがたし。皆思ひ思ひの穴へはいつて世をくらすと見えたり。又は、死去の人も多かるべし。水の流と人の行方は、様々なる者也。老人衆昔し知る人の行方しれぬを、考へ見るべし。

浮世いかだ舟

作者不詳

●天道をおそるべき事

今はむかし、うき世坊御前にしてこう申けるきざみ、天の絆は、音もなく、香もなしとは、いづれをさしてか、天道とはいふべきと、仰せられしに、浮世坊申やう、天なにをかいふや。四時おこなはれ、萬物こゝになると有。四季のめぐり、いにしへ今、すこしもたがはず。萬物の生じてさかえ、花さき、みのりれさまる事定まりて、あらたまらず、鳥のさへづり、けだもの丶なく、みな是その節に應ず、是天道の理なり。人として、天理にしたがふ時は、ながらへ、天理にたがふ時は、ほろぶ。それ天理にまかせぬれど、もとめずして、おのづから利有。人の欲にしたがふ時は、思の外なる害有。すべて、人の善惡、かならずそのむくひなきにあらず、善をなすものには、天道是にむくゆるに、さいはひをほどこし、惡をなすものには、天道是にむくゆるに、わざはひをわたへ給ふ。さらにすこしもあやまつことなし。善惡をなすもの、そのむくひなしといふことなかれ。たゞそのむくひの時節いまだいたらずとしるべし。たとへは、惡をなして、そのむくひをのがれんがために、たかくとんで、雲をしのぎ、とをくはしりて、地をくゞる共、かくれがたく、のがれがたし。只そのむくひのきたる事の、おそきと、はやきとをあらそふのみなり。豆をうゆれど、豆をえ、粟をうゆれど、粟を生ず。善惡さらにそのむくひなしといふべからず。天網恢々としておろそかなれ共、もらさずといへり。漢

の馬援がいはく、身を終るまで、善をおこなへども、善はなをたらざるがごとし。一日悪をおこなへども、悪はおのづからあまりありといへり。まことに善をなす事は、なせども〳〵、あく事なし。すこしなれども、悪をなせば、みづからあまり、人にもあまりて、たとへば一粒の毒丸の、よく命をうばふがごとし。されば天道とて、空にあふぎて、かたちをもとむべからず。人人心のうちに、みなそなへて是あり。康節邵先生のいへることあり、天はきけども、しづかにして音なし、蒼蒼いづれの所にかたづねん、高きにあらず、遠きにあらず、すべてたゞ人の心にあり。人の心、一念を生ずれば、天地こと〳〵くみなしる、善悪にもしむくひなくば、乾坤かならず遠きにあらずといへり。天のことは、をともなく、かもなし、いづれの所にかたづねんといへり。空の色の蒼々としてあをく、はとりもなく、きはもなし。いづれの所にか、天をたづねてみる事を得ん。たかきにもあらず、とほきにもあらずと人の心に有。善は天理にしたがひ、悪は天理にそむく、人の念慮は、天よくしろしめす、されば善をなして、わざはひきたり。悪をなして、さいはひあらず、是すなはち、天道にわたくしありといふべし。善にはさいはひあり。悪にはわざはひある。是天道のすぐなる所なり。人をあざむく者は、まづ、みづからわが心をあざむく也。心をあざむくは、是その天道をあざむくなり。いつはりをもつて、まことをかざり、わたくしをもつて、正直をくらます、他人は是を信ずべく、天道はいつはるべからず、罪を天に獲れば、いのるに所なしと、論語にもしるせり。是ゆゑに、仁義禮智信は、天の常の道也。人もし不仁にして、物をめぐまず、あはれみをしらず、不義にして、欲ふかくむさぼり、不禮にしてをごり、人をあなどり、不智にして、よこしまをかまへ、不信にして、いつはり、あざむくべきやからは、天道にそむくがゆゑに、かならず思ひかけぬわざはひにかゝる也。是をしりて身におこなひ、心にしめてわす

れざれど、天の道にかなふがゆゑに、福ながく子孫につたはり、家さかふるもの也。

●醫師は生ながら佛なる事

今はむかし、うき世坊御まへにしこう申ける折ふし、くすしの通齋、をなじくつめたり。浮世坊問けるやう、さて此ほどは、めづらしき療治もなかりしかといふ。通齋こたへていふやう、町人をれうぢせし中に、ある貧乏人かわづらひける。その病さへ貧乏らしや、痔をわづらひ侍べる。何としてもかつことさへならひて、やうやう痔をわづらふといへど、浮世坊聞て、かたのうすいものは、みなさやうなものぢや、迚もわづらはゞ、錢瘡か、ふくびやうかならど、またよからうといふ。通齋聞て、それは我等は、生ながら、二体の佛になつたといふ。そのゆゑは、まづ病人をれうぢすれど、その家うちの者共が、藥師さま〳〵といふ。さて本腹させて後は、尻くらひくわんをんぢやとかたる。とかく、藥代をしかぬがゆゑぢや。

●不孝不肖の子はもたざるにはしかじといふ事

今はむかし、浮世坊、御まへに、しこう申けるきざみ、父母威嚴にして慈あるときは、すなはち子女おぢつつしみて、しかも孝有といへり。人の親の子をはごくむ道、まことにおろそかならず。もとよりをのれ〳〵のうけたる所、天の命ずる性理、その氣質によりてひとしからず、鈍智聰拙しなじなり。むかしの聖王にも、堯に丹朱あり。舜に商均あり。かゝる不肖の子は、堯舜とてもすべきやうなし。その中に、上智はをしへられずとて、生れつき上智、聰明の者は、をしへをまたずして、をのづからよき性理にかなひ、心にしめて身におこなふ、これ聖人の事也。さて下愚はうつらずとて、いたつて拙おろかに生れつきたるものは、いかほどすゝめてをしゆれ共、しる事なし。只中智とて、聖人にもあらず、至愚にもあらぬものは、をしゆれど、道をしり、をしへざれど、しる事なし。是にむかつて、

その親よくその性にしたがひて、をしへをいたすべし。親きびしくして、道ををしゆれど、かならず名をはどこす子をいだす也。善惡をわかたず、めた物にたゞかはゆがるばかりにして、その子をほしゐまゝにそだつるは、畜類の子をそだつるにたがはずや。子をそだてゝ道ををしへざるは、父のあやまち也。をしへてつとめざるは、子のとが也といへり。たとへば、その父世に有て道をつとめ、徳をほどこして、世の人また是をたうとみて、名もたかゝりけるを、その子父に似ず、心ざしをとりては、家も衰微し、名もうづもれて、あるがひもなくなりはつる也。後にはその子、三たび變化して、あらぬものになりゆくべし。まづ一番には、變して蝗となる、蝗は田地をくらひあらすもの也。すでに心だてあしけれど、侍は知行をとりあげられ、地下人は身上をとろへて、田地をうりてくらふゆへに、是をたとふるに蝗のごとし。第二番には、蠧魚といふ蟲に變ず。蠧は書物の中に生じて、書物をくらひ、柱の中に生じて、柱をくらひたをす。父がたくはへたる書物をうり、家をうりてくらひたをる。是をたとふるに、蠧のごとし。さて第三番には、變じて大蟲となる。大蟲とは、蟒といふへびの事也。よく人をくらふ、かの不肖の子、すでに田地をうり、家をうりてくらひつくし、其後はすべき事なくて、辻ぎり、强盜をいたして、人をころし、人をたをす、是をたとふるに、大虫のごとしと也。かゝるともがら世にすくなからず、後なきを不孝の第一とする事は、孟子のいましめ也。子なければ、先祖の廟のたえゆく事をもつて、子なきものを、不孝の第一とはせられしか共、かゝる不肖の子は、たとひ數人有共用なし。親の家を枯却して、名をうづみ、をのれ又あるかひなく成侍べらんは、子なきにはしかじといふもの也。

（未完）

随感随筆（三）

白松園主人

女子は廉恥心を失ふべからず

學問なけれど、子女を教育する事能はず、學問ありとも品行正しからざれど、又女子を教育する事能はず。學問と品行とはいづれをか取るべからん、之盖し一の問題なり。つら〱目今女子社會の傾向を視るに、學問と品行とは、到底一致すること能はざるかの觀なきを得ず。之畢竟、學問の最大目的は、身を立て行を正しうせんことにあるを、忘れたるによるなり。然らずや、寧、學問なくとも、品行の正しきに取らんか、物質的文明の世に處え、生存競爭の社會に立たんには、尤も女子の智識を涵養せざれど、國民の根本をして、薄弱に陷らしむる患あり。豈、學問なくして可ならんや。さては、いかにしてよろしきか、悲いかな、今日女子教育の弊風は、學問の進むと共に、益々惰落の歩を進むる事、日は一日より甚しからんとす。思ふに、女子の尤も愼むべく、重んずべきは、恥心にあり。抑も恥心は萬善の母なり。故に恥心の失せなんは、萬善の滅亡時期なり。不幸にして我が國目下道義上の大欠點、大汚濁といふべきは、此の恥心の根本的に破壞せられんとすることなり。此の恥心なき故に、自己の品行は修まらず、子女の教育は擧らず、遂に一家の子弟をして、悉く腐敗糜爛せしむるに至る。山崎闇齋の母佐久間氏、闇齋の幼時常に之れに訓へて曰く、鷹は饑ゑても穀を啄むことなし、士の尚ぶべきは志にあり、汝鷹に恥づること勿れと。其の祖母多治比氏も、之れを戒めて曰く、身の直一錢なれど、眼の直百貫なり、汝書を讀むには活讀せよ、盲人と等しきこと勿れと。此の家庭は遂に、後年の豪傑を生せしめたり。實に此の母氏の言の如く、人をして激勵奮發せしむるには、一の恥心より大なるはなし。此の恥心を盛んならしめんとするに、其の母たる者、輕佻浮薄にして、いかでか養

成することを得べけんや。

家庭の母たらん者は、養ふに廉恥を主として、士氣を鼓舞し節操を尚うせよ。

昔と今との女子の品格

吾人が己に云ふ如く、女子の品格は恥を知るにあり。我が國昔時の女子は、極めて恥に重きを置きたりき。されど夫婦は別居して、女の子は母に、男の子は父の許に養はれたり。かくては不便なりとて、漸く同居するに至れり。されども夫婦相携へて、外に出づる事は甚稀なりき。女は外に出づるときには、必ず被衣して面をかくして男子に物いはれても、夫の外はすべて猥りに答へざりき。内にをれど、常に几帳のかげにかくれ、親しき男子といへども、簾を隔てざれどもの言はず、されど男に面を見らるゝことは、こよなき恥とし、若しわりなく入りて見るときは、女子の神聖を犯す者と云たりき。こは古書古歌、若くは古畫によりても見る所にして、彼の女房の、わた殿渡るをりなど、かりそめの時にても、檜扇つと面にさし掩ひたるも、その面見らるゝことの、耻かしければなり。世いたく下りて、徳川の頃に至りても、猶その遺風存して、氣儘頭巾といふものに、面をかくして外に出でけるが、後ちには只、冬時防寒の具とのみなれり、今のお高祖頭巾之なり。南畝叢書にいはく、

太宰の獨語に、江戸の婦女外に出づるに、昔は氣儘とて、くろき絹にて頭面をつゝみ、目ばかりをあらはしけるが、其後綿にて頭面をつゝみしは、我が廿あまり、寶永の頃まで云かなりき。云々案ずるに、今江戸にお高祖頭巾といふもの、氣まゝ頭巾の遺製ならん。

（五元集）に「目ばかりを氣儘頭巾の浮世かな」其角

既往の歴史はかくの如し。然るに今の世の女子は如何。面を掩ふは不便としてゆるさんも、祭禮に演劇に、晴れらかにつくろひて、つとめて人に其の面を視られんことを欲し、酒宴の席に侍しては、知らぬ人にさへ剌

を通じて、交を求め、人の國より習へる、舞踏とかいふたはわざをさへして、只男子に親近せざらんことを恐る。志操已にいやしうして、見識已に卑し。品格何ぞ古人と較するを得ん。おゝかくの如くにして、猶ほ女子の矯風を欲しぬとも、木に縁りて魚を求むるよりも、難きわざにあらざらめや。（未完）

妻（承前）

安藤紫光譯

されど世はとこしへに春ならず。わが友が、その財産を投じて、大なる投機事業にたづさはりしは、不幸なる事なりき。結婚後未數月ならずして、急激なる不運のみうちつゞきたりしかど、レスリーハ財産を失ひて、殆貧窮に陷りたり。しばらくのほどは、自蔽ひかくして、さりげなく振舞ひけれど、なか〳〵に容貌は瘦せおとろへ、心は千々にくだけぬ、當時の生活は、たゞ苦痛のみ充てるものなりしかども、殊に堪へがたきまで、その苦を增しゝものは、妻の前にては、ありしながらの笑を裝はざるをえざる事なりき。蓋し、レスリーは、失敗の事をつげて、妻を驚かしむる事をえなさゞりけれどなり。されど、女はその愛人の事とて、目敏くも、何かよからぬ事の、夫の身におこりたりと推しはかりぬ。妻は、夫の顏色の異りたる事、低き歎息を發する事などを認めたれど、レスリーの裝はむと試みたりし勢もなく、不活潑なる愉快のさまには欺れざりき。

かゝりしかど、妻はそのいき〳〵せる力と、やさしき言とを以て、夫の心を、もとの幸あるさまにひきかへさむとつとめたりしが、その眞情はなか〳〵に、レスリーの心を惱ましむるものとぞなりぬる。その妻の愛らしき心をもてることを知れど、知るにつけて、ますますその者を貧窮に苦しめむことの、近からむをおもひて、その心は攪き亂されぬ。おもへらく「しばらく

のほどに、その頰ににほへる笑も、きえ失すべく、その唇に上れる歌も、きこえずなるべく、その眼の光も、悲に曇りて消えぬべく、今よろこびしげに、その心の底に輝ける幸福なる精神も、社會の、憂慮、及、不幸の爲に、わが心の如く沈みゆくなるべし」と。

終に彼は一日われを訪ひ、極めて失望の調子にて、そのすべての地位を語りぬ。余は之を聞きて、「君の妻君は、すべての事を知り給へりや」と問ひけるに、友は怺へかねて、涙と共に語りいでけるやう、「若、われをあはれとおぼさば、願はくは妻につきて語り給ふな。妻の事を考ふるすらも、われは心殆狂はむとす」と。

余はいひぬ。「何故君は知らせ給はぬ。かの君は、晩かれ早かれ、知り給はざるべからず。君は長くえかくしおほせじ、而して、君が知らせ給はぬ内に、他より之を覺り給はむ時、その驚愕は如何ばかりなるべきぞ。寧君より語り給へ。すべてその愛する人の言語は、極めて酷しき報知をも、和ぐる力あるものなればなり。且、君は、かの君よりうくべき同情といふ慰を、自棄てたるものにして、また、互に心を結びつくべき唯一の連鎖たるもの、即、思想感情の、同身一體といへることを、傷はむとせるなり。彼の君は速に、何物か君の心中に潜めるあるを知らむ。而して、眞實の愛情は、隔心あるを許さず、たとひその事は、悲しき事にもあれ、愛人がおのれに隱せる事あるを知りては、その心をそこなひ辱しめられたるか如きおもひを懷かしむるになりぬへし。

友は答へぬ。「あゝさりながら友よ、是より以往、妻の身の上に及ぼすべき激變は、如何なるものなるべきか、其の夫は、一の乞食の徒たることを告ぐる時、その悲痛にうたるゝことは、そもいかなるべきかとおもへば、……………わが妻は、生活のすべての華美を見捨て、社會のすべての愉快を見捨てゝ、われと共に貧困窮苦に沈まざるべからざるよ。其の絶えず光輝ある階級にありて、各の人より、光明として仰かれ、各の人より、

稱讃を受けてふるまひ來りしものを、その社會よりひき下すに至りたる事を告ぐるは、…………いかで彼女は貧困に堪へうべきぞ。彼女は富貴の粉飾の間に生長したるものなり、いかで彼女は、社會より疎外せらるるに堪へうべきぞ。彼女は交際社會に崇拜せられし者なりしなり。嗚呼この事を告げむは、その心を傷ましむる事なり。其は其の心を傷ましむる事なり」と。

余は、彼の悲が、その容貌擧動によりて、よくあらはされたるを見、その言はむとする所を妨げざりき。蓋、憂きは語るに慰むものなればなり。かくて、その心の昂まりが靜まりて、不機嫌なる沈默に復せしとき、余は徐に、もとの問題に立ち戻りて、直にその妻に打明くべき旨をすゝめぬ。されど友は、かなしげなれども、確なるさまに其の頭を振りぬ。

「されど君は、いかにして、そを秘密に保たむとおもひ給ふか、君のかはれる身上に適したる處置をとらむ爲には、彼の君をして、そを知らしむべき事は必要なる事にはあらじか。君は生活の方法を變へざるべからず。(かくいひしに、友は苦痛の色を容貌にあらはせるを認めたれど)さいふとも、氣にかけ給ふこと勿れ。われは確に君は、幸福なるものを、外部に存する者となすものにあらざることを信ず。君は猶、君が卑しき住居をなせばとて、之をいやしむが如きものにあらざる友、愛情温き友を有せり。且、メリーの君と共に住ひ給はゞ、うるはしき邸宅などにあらずとも、確に幸福にはおはさずや」と、われのいひたるに、友は情に激せるさまにて叫べるやう「余は妻とともにならば、植生の小舍のいぶせきにありても、幸福にればえぬべし。われは妻と共にならば、貧に陷り塵にまみれむも、苦しからじ。…………われは然らむ。…………われは然らむ。…………彼女の上に幸あれかし。彼女の上に幸あれかし。」と悲痛愛情交々相迫りて、燃ゆるばかりの心を以て叫出せり。

余は進みて友の手をとり、熱心に握りつめつゝいへる

やう「友よ、わが言を信ぜよ。わが言を信ぜよ。かの君は君とともなひうべきものなり。然り、ともなひ得べきといはむより、立ちてえて、それは彼の君にとりては、喜悅と勝利との事なるべく、そは彼の君の天性の、すべての潛める元氣と、熱心なる同情とを、喚び起すなるべし。かの君は繁榮なる地位の爲に、君を愛するにあらずして、君の爲に、君を愛するものなる事を證しえむを、悅ぶべければなり。凡、すべて眞實を有する婦人の心には、貴き天火の燦爛たるもののあるなり。そは日中の繁榮なる時には、潛伏してあらはれざれども、暗き困難の時にあたりては、光を發し、光輝を放ち、焰々として燃ゆるに至る。誰も社會の困難なる悲境に臨むにあらずむ、その親愛せる妻は、如何なるものなるか、その妻は如何なる忠實なる天使なるかを、知るものはあらず」と。

わが熱心なる言ひ方と、わが比諭的の口調とは、幾分かレスリーの心を動しゐたるもの丶如くなりき。われはわが聽者を處理せざるべからざることを知りしかぞ、われは先にいひ出し丶言葉をつぎて、遂に之を說服し、友をして家に歸りて、その妻に打明けしめき。われは友に對しては、然いひたりしにもか丶はらず、打明けていへぞ、われは少しくその結果を懸念したりき。誰か常に快樂の裡にのみありしもの丶、忍耐ある事を恃みえむや。その輕快なる精神も、不意に卑賤なる境遇に零落すべきいとはしき事が、目の前にせまりたる時は、之にそむき去ることもありうべく、これまで心のま丶にふるまひゐたりし愉快なるあたりを、離れかぬる事もありうべし。且、亦、華美なる生活をなせる人か、零落したる時は、他の階級の人の知らざる、多くの苦痛の之に伴ふものなれぞなり、一言すれぞ、われは翌朝レスリーに出遇ふにあたり、心に怖る丶所ありき。

（未完）

大和ばなし

蓬生屋女史

かけまくもかしこけれど、伊耶那岐の大御神、天照太神、月讀の神、建速須佐之男命、三柱の神をつくり給ひ、いたくよろこびまして、その御頸にかけ給ふ玉の緒もゆらにとりゆらがし、天照大御神に詔り給ひ、汝は高天が原を知ろしめせとて、御頸珠を賜はりぬ。次に月讀の神にのりたまひ、汝命は夜の食國を知らせ、つぎに建速須佐之男の神に、いましは青海原をしらせとのり給ふ。これによりて、天照太御神、月讀の神は、父神の仰せのまゝに、みなその知らす國にとまかりぬ。ひとり須佐之男の命は、父神の仰をかしこまず、いみじうむづかり泣き玉ひ、遂に青山を枯山と泣きからし、河海をも悉く泣き乾かしたまひしに、もろ〳〵の悪神、時を得て群り起り、狹蠅わき出で、よろづのわざはひ悉くおこりぬ。父御神之を御らんぜられ、いましは何故に我が申す國を知らさで、其處にさは泣くぞと問はせたまふに、われは、母神のおはす國にまかりたくて、泣き侍ると答へければ、父御神いたく怒りたまひ、我が申す如く知らさぬ命は、我が子にあらじ、神やらひにやらんと仰すに、さらば天照太御神に請ひて、のちにまかるべしとて、やげて、上天にのぼり給ひぬ。時に山川なりとゞろき、國土悉く震ひたり。天照大御神こを聞こしめして、いみじうおどろき、わがなせの命の上ぼり來るは、必ずや高天が原を奪はんとの心なるべし、用意なくてやはとて、御髪をとき、御美豆羅をまとひ、御かづらをつけ、八尺勾璁の五百津のみすまるの珠をまとひ、持ちたまひて、そびらに千人の靫を負ひ、むねには五百入の靫をつけ、伊都の竹鞆を佩き、弓をとり、矢をもたせて、いざやとまち給ふに、須佐之男命のぼりたまひて、我は邪の心ありて、まがれるにはあらず、やつがれ、母命の國に行かましと思ひて、泣きはべりしに、父命いかり給ひて、此の國に



あるべからずとて、神やらひにやらんとし給へど、またかなしくて、姉命の助け給ふやうにと請ひ奉りにのぼりぬ。その清き心を知らんとて、天照大御神、その佩かせ給へる十拳劒をふりそゝぎ給へるに、みはしらのひめ神生ひ出で給へり、此の度は須佐之男命、天照大神に請ひ、其のみゝづらの玉をとりて、ふりすて給ひしに、五柱の神生ひ出で給ひぬ。之によりて須佐之男の命、我がさねによりて生む所は皆手弱女なり、これれのづから清き心は明かなり、我れ勝ち申しぬとて、天照太神の營田の阿にいたり、其のみぞをうづめ、大嘗をきこしめす殿に入りて、糞まりちらし給ひぬ。されど、天照大神はとがめ給はず、笑はせ給ひて、さや

うのきたなきもの、其處にはせで、田のくろにてせよとの給へど、須佐之男命はなはいろ〳〵とあしきふるまひやまず、姉神にさからひましぬ。天照大神は玆に忌服屋にまかり、神御衣をくりたまふに、須佐之男命は又やそこに至り、服屋の頂に穴をうがち、其内に入らせ給ひて、天の班馬を逆はぎにはぎて、おとし入れたまひしに、織女之を見ておどろき、まろびおちて、みまかりぬ。天照大神、遂に見かしこみ給ひて、天の岩屋の内にこもりまし、世の中くろうなりにけり。かやうに弟命のあれ給ひしにも、中〳〵御心のどかに、怒り給はせざりし大神が御心のめでたさに、ならはん事をと姫だちにいのるばかりになん。

貧乏神

田端留守居

世に貧乏神ありと云ふ。なしと云ふ。なしや、あり。あらば如何なる神にか、その形を知らず。しからば幽幻のものにや、さにもあらず。しからば、韓愈がいはゆる梁に嘯くあり、燭火をかゝげて之を見る、見えず。之神なるか、否、聲なし。さらば、堂に立つものあり。ゆきて之を見る、見えず。之其の神か、いなしからず。神に形なし、吾が影にふるゝあり。之をとらへんとして、とらへ得ず。これその魔神か、いなしからず。此神や、形もなし。聲もなし。さらば氣ありや、それもまたなし。しからば貧乏神、はたしてなきにあらずや。否あり。あらば如何なるものにや、それ、もとより形なし。聲なし。氣なし。たゞ物にふれて氣を生じ、招ぐ所によりて來る。貧乏神、もとあるにあらず。人、その業をおこたりすさむ、忽ち貧乏神おそひ來りぬ。人、奢侈度なし、あしたに錦衣をつくり、夕べに高屋をつくり、もるに酒を以てし、食ふに五味を以てし、たのしみに日を送り、すさみに夜を更かす。それ、もろこしの紂王が象箸をつくりし折り箕子歎じて、かれ、象箸をつくる、もるに土簋を以てせず、まさに玉杯を以

てすべしと、玉杯象箸、藜藿を羹にし、短褐をきて、茆茨の下にをらず、則錦衣九重高臺廣室此にかなへて求めむ、天下も足らずと云ひげるが、げに紂王、之がためは國を滅ぼし、身を亡ぼしたり。魔神は實に之なり。貧乏神實にこれなり。支那の大國の王すら此の如し、況んや王ならぬ人、すさみて、怠りて、おごりて、如何で其の家、其の身の立つ事あらん。あはれ貧乏神、他に住むにあらず。已が心の中にあり。もと氣なし。聲なし。人の心によりて生ずる神なり。おそるべし。おもふべし。

張合（その四）

白魚女史

片頰の愛はいとゞ身にしむものなり。まして最期の言、文代は、前後もしらずなき沈みぬ。父はやがて淚を拂ひ、六尺の孤、たくするにきづかはしき弟にはあらじ、そちもまた浪男にいとはるゝやうの片輪にもあるまじ、泣くな、泣くな、もう泣くなと云へど、己も泣きぬ、子も泣きぬ、泣ひて夜をあかし、泣ひて日をくらしぬる夕つ方、弟、白川元雄來りぬ。弟のかげを見るや、勝は一言、二言語りて笑ひしが、腦のなやみ烈しかりしを、君が訪ふまでと堪へて起き居たり、ゆるしてよとて、床をひきかつぎて臥すよとすれど、にはかに熱出で、こん〳〵とねぶるよとみれど、はや前後不覺となりぬ。元雄おどろき、自から走りて、人をたのみ、所の名醫を招きて診察せしめたれど、充血遂にとけずして、二日ばかりありて、遂によみ路にと旅立ちぬ。なしと思ひし兄を得しと思へど、はかなくまた消ゆる露の玉の緒、中々にあはずば、今者に悲しき事もなからましをと、元雄も兄のかばねにとりつきて、つく〴〵と淚をこぼしぬ。されど是非なし、後々のとぶらひねんごろにすまし、所を去らむ、文代が悲しみも少しは去らんかとて、その住家をば、文代につかへた

る守りの、近傍にとつげるにあづけて、すゝまぬ文代がふぢ衣をきかへさせ、あづまへと伴ひぬ。叔母も之を見、之を聞きて、ともに袖をぬらしぬ。さらでも血脈のかなしみ、孤子のあはれさへそひて、叔父は文代をふびんがり、あはれがり、つとめて之をなぐさめんとて、庭に伴ひ、市にもつれて、請はぬ物さま〴〵買ひとらせて、朝に、むんに、晝間も間なく、文代は如何にしつる、如何にしつると訪ひなぐさむれど、叔母もやさしう、膝近うよせては、畫を見せ、本を見せ、またはかなき寫眞をとり出でゝ之を見せ、之は文學博士の何某、之はかゝし、之は誰の令嬢、かれの夫人よなど一々にとく中に、文代が耳にとまり、目にかゞやきしは浪男の寫眞なり。之は從兄樣のなりとて、さしつくる寫眞、文代は手にとりて見れど、洋服姿立派に、子供ながらりゝしう思はれて、眼もはなたずながめたり。之や忘れぬ思のはじめ、浪男は如何にながむらん、此の時しも、文學研究のため洋行中なりき。

後黑川勝の書發行されたり。元雄は一先づ其の書をあがなひ、信實によみて、誠に感歎し、遂に筆をとりて、之を評し、某冊子に之をのせ、また其の來歷をものせたり。やがて諸新聞、諸雜誌、みな之をいみじく評して、かしがましきばかりなり。日來は烏山人と字して、難をさがし、わるくちを叩く批評家も、之には深く感じけん、アーと一聲さけびて、筆を投げたり。何れの文豪も之に感じ、擧つて其のはかなきを惜しみたり。あはれたゞ一度出して、一度に人を感ぜしむ、元雄が擴張の力もあらんが、又その文のすぐれたるや知らるべし。かくては廿年の苦慮も遺憾なかるべし。

ひまゆく駒のあし早み、日はゝやく月とつもり、年とたち春を迎へ冬をおくるはや四年、浪男は西海の花、はゞ拾ひ得たりとて、やがて本國へかへりぬ。父母は更にも云はず、やから、うからさへよろこび迎へぬ。外にも會を催し、歡迎するもの多かりき。

文代は今は十五歲、年のつもるにつれて、なづかしき



心も重なり、まだ見ね其の人を思ひて、はるかに西の空をながめ、思ふ人、天くだりこんものならなくにと、人知れずうち出でし事さへありたるを、誠の人を見、其のさま、其の風を見てはいよ／＼やんごとなく思はれぬ。浪男が心は如何に、父がとやかく文代の事をうち語らふを、さのみ耳にもとまらぬげ、身にもしまぬげ、たゞ輕く、從妹を得たるをよろこびたるのみ、叔父のうちとけ、めでらるゝにひきかへて、浪男は、さばかりうちとけず。今まで一方ならぬ父の愛、身にしむばかり、叔父叔母の慈悲うけたる文代には、いたく冷やかに感じ、何となく、己の足らはぬ心地して、浪男に逢ふ後ごとに、思はず襟かき合はしたり。

浪男かへりて一月餘、やゝひまになりけれど、一日書齋に入り、叔父が文などよみをる所へ、父、入り來りたり。どうだ其文、文も誠に我が兄であろふ。其の子文代はまたすぐれたるもの、あつぱれ栴檀、そちは如何に思ふぞやと云ふに、浪男は少しくほゝ笑み、まことにくからぬ少女、よき妹を得候と答ふるに、父は膝をすゝませ、否、妹ではない、そちの妻にせましと思ひて、兄にこんまうせしなり。やがては結婚の式を行はんつもり、異存はあるまじなと云はれて、浪男は大におどろき、しばしは言葉出でざりしが、父上、異存はあります、私は他に思ふ人があります。此の頃に父上に願はんとぞんじをりましたと、流石は西海に渡りしほどありて、よどみなくてぞめり。父は案の外なる心地して、浪男、如何に西海に渡りしとて、自由結婚はゆるさぬぞ。走れば妾となる。己が眼鏡に叶はぬものは、妻とする事はできぬぞ、あやふるまいぞやと、はや一徹、膝を固くしてすゝみたり。



文林



社頭新樹　水野忠敬

みやしろの神のみいつもいと高く
かへての若葉しげりあひにけり

雨中新樹　木村正辭

み枝さし紅葉をぐらき庭のもに
いぶせくもふるかさみだれの雨

岡新樹　江刺恒久

岡こえの道もをくらく茂おひて
ゆきかひ絶えぬ若葉さすころ

野新樹　青木修

野司のしるしとなりて若楓
みどりは花におとらざりけり

月前新樹　申橋隆美

みつえさす木々の若葉を照りわたる
月のかげこそ涼しかりけれ

夕新樹　日暮泰豐

ゆふぐれに青葉しげれる夏山は
なほうすくらくなりにける哉

川新樹　中山寛

里川をながるゝ水はあさけれど
つゝみの青葉いろふかくして

朝新樹　南角正德

日暮しの森の若葉やしげるらん
けさ見し草に露はれきけり

雨後新樹　諏訪忠元

村雨のはれたるけさは若かへで
ひとしほまさるみどりなりけり

新樹露　三輪義方

まなくちるみつえの露に苔むせる
こかげの石もぬれわたりけり

失題　岡部譲
若たけの葉末のつゆにきらめきて
もるかげ涼しまとのともし火

暁郭公　同
ほとゝぎす待ちにし宵は難面くて
こゝろありけの月になくなり

楠正行母　柴田靜榮
はゝそぞの露の恵みのちござくら
たぐひなき香に咲出でにけり

山新樹　諏訪直子
茂りあふ若葉にそよぐ夕風も
すゞしく見ゆる山本の里

布引といへる琵琶のゆゑよしを志るせる文　三浦千春

柿崎干城ぬしの、ひめもたれたる、布引といへる琵琶は、いと古き世のものにて、甲の板のうらに、其の銘を志るし、文治の年號を、かきつけあり。いかなれぞ、布引と名づけけるにや、そは志るべからねど、此の琵琶の、傳はり來つるゆゑよしをきくに、そのかみ、薩摩の宰相の君、老て仕へをしぞき、景山公といひけるは、江戸の品川の別業に、志づかに世をさけてなんおはしける。此の君琵琶を好みて、さきに都に名高かりし、檢校荻野なにがしより、平曲の秘事をならひつたへて、其の伎にあやしきまで、すぐれたまひけるが、其のころ江戸にて物する平曲は、都のとはふしもことに、志らべも優ならず、不適意とて、月の夕雪の朝のつれづれにも、只ひとりのみ彈ならしつゝ、友とする人のなきを、歎きれはしけるに、天保のころほひ、尾張の殿人、羽鳥清雄が父、松逸といへる人、江戸にありて、平曲の上手なるよし、傳へ聞きたまひて、品川のなりどころに、招き給ひけるに、これなんかの荻野檢校が流れにて、こよなかりしかば、みこゝろに適ひて、其の曲の妙なるを、愛たまふあまりにや、あるとき、青地

の錦の袋にいれたるをとり出で、こはわが久しく、ひめもてる琵琶なるが、後の世に名をのこすべき、同好の人に傳へむと思ひしを、いま足下の、此の道に志あつきにめでゝ、これを與ふるぞとてたまはりけり。この後松遂を、又なき琵琶のあそびがたきと志て、此の道のまじはり淺からざりしが、つひに淺野より傳へうけたまひし、大秘事の曲をさへに、松遂に授け給へりけり。かくて松遂、年ごろ經て、國に歸る時、此の琵琶を携へ來て、家にのこしけるよりぞ、永く羽鳥氏の寶とは傳はりける。さるを近きころ、愛知人にて、平曲このむなにがしとか、さるべきゆかりありて、今の羽鳥氏のあるじ、清永といへるに、いとねんごろに乞ひもとめて、その琵琶を傳へ秘もてりしを、ゆゑありて、干城ぬしの物とは成りける也とぞ。この干城ぬし、稟性猛くをゝしく、はた風雅にして文を好み、いとまあれば、琵琶をかき撫て、勇める氣を養ひ樂しみとす。まことに其の志、いうにやさしくもあるかな。今天の下に二ッとなき、此の布引を得て、ぬしの喜びいかばかりならむ。布引もまたぬしにあひて、聲聞知られむこと、うれしとこそ思ふべけれ。此びはのゆゑよしを、おのれに志るしてよとこはるゝに、いなびがたくて、きけるまゝを、かくはものしつ。

こは、今より十五六年ばかりのむかし、おのが國にありけるころ、尾張の國人、柿崎干城がもとめによりて、書てあたへし草稿なり。文治年中の琵琶の、今の世まで傳はれるも、めづらしといふべし。

明治三十二年五月

正●誤●

前號文林歌中「むかし●見し鏡のかげも●たのまずば、●あしくは人のうつさゞりけん」の上の句は「むかひ見し鏡のかげをたのまずば」の誤なり。



●聖徳　畏かれども、臣民のために御心を煩はし給ふは、今に始めぬ事ながら、軍事、及、敎育のことなどには、殊に深く御心をおかせ給ひ、これに關する法令は、一々御みづから審査せさせ給ひ、時によりては、一件を三四日がほども、點撿せさせ給ふ事さへれはしますとぞ。いとも畏き御事なり。殊に高等師範學校卒業生には、本年より宮城拜觀の特典を與へられたるは、全く、國民敎育の柱たるべき者なるよりして、陛下の大御心よりせさせ給ひしなりとなむ。

●東宮殿下の御仁心　御心を文武の二道にかけさせ給ひ、御仁心深く在す事は、すべての民の仰ぎ奉る處なるが、今承る所によれば、先頃御獵遊の折、御手づから一頭の鹿を射止めさせたまひ、さて後、御旅館にて、右の死鹿を御覽はして

　おもしろく打ちはしつれど啼く鹿の
　　こゑきくときはあはれなりけり

と一首あそばし給ひしとなん。御歌のさまは申さねど、最も御心の優しう覺え奉りて、御仁徳を稱へぬものはなかりし中に、某の女官

　あはれてふその御言葉にいにしへの
　　うか野のしかも音をや添ふらん

と詠じ奉りしとなん、右の歌うか野の鹿とあるは、仁徳天皇の御故事を思ひよせしとなり。

●横濱行幸　去にし九日、横濱春季競馬會に臨幸せさせ給へり。先、横濱着御の後、しばし停車場樓上にて、休憩せさせ給ひ、居留地外國人委員長ロビンソン、及、同副委員長の兩氏に拜謁を賜はれり。此の時、兩氏は、左の頌德表(原英文)を捧讀せり。

　横濱居留地在住諸外國臣民總代ロビンソン誠恐誠惶頓首謹で上表す伏而惟るに　天皇陛下畏くも横濱市に臨幸あらせ給ふ外臣等此佳節に遭遇し齊しく　陛

下に敬虔の赤誠を將て恐敬の至意を捧表せんとす茲に　鳳輦を本港に奉迎し謹で外臣等の懇願を容させられ居留地内を御通輦あらせられ親しく盛儀を拜することを得るは外臣等の深く光榮として轉た感激に堪へざる處なり夫れ横濱の地たるや今より四十年前に在ては僅に海濱の一村漁落に過ぎず爾來地闢け家密に百貨輻湊四民絡繹既に一大都市の繁榮を爲し貿易場の樞要地を占むるに至れり而して外臣等五千有餘人も亦資に此盛運に與かるを得たるは何の幸か之に加へん是れ全く陛下無疆の德澤に因らざるはなし仰ぎ冀くは明治の紀念を表彰せる此の昭明寬裕の聖德を以て永く邦土を統治あらせられんことを懇祈切望の至りに堪へず外臣等誠恐誠惶謹で上表以聞す

陛下には、其の誠意を嘉納せさせ給ふ御旨の勅語を賜はり、さて會場に臨ませ給ふ。御途中、居留地を通御せさせ給ひ、御輦の上蓋をのぞきて、歡迎御嘉納の大御心を示させ給へり。こは、歐羅巴諸國の帝室にても稀有の事にて、我が國にても、僅に、憲法發布、廿七八年戰役御凱旋、大演習の際神戸居留地通御の三事を除く外、未せさせ給はぬ御特例なりとぞ。かくて競馬をみそなはし、午后六時すぐるころ還御せさせ給へり。

●行啓　皇后陛下には、去し八日、上野公園なる日本美術協會、明治美術協會の春季美術展覧會、及、第四次漆工競技會に臨ませ給へり。

●東宮行啓　去し六日、上野美術協會の春季美術展覧會に、行啓せさせ給ひ、還御の御途次、第一高等學校に立ち寄らせ給ひ、生徒の科業擊劍等を御覧せさせ給へり。

●同　翌七日、有栖川宮邸に行啓せさせ給へり。

●宮中御歌會　本月五日、月並御歌會に於ける、御當座通題の歌を承はるに左の如し。

初着羅衣

夏衣身になれがたくおぼゆるや春を忘れぬ心なるらん　正風

白妙の衣換して今朝よりはひさへに夏のたつを社知れ　詮

ぬぎかへし蟬の衣のうすければまだ肌寒し夏のあさ風　利悳

重ねてし花染衣ぬぎすてゝ麻のひさへにかへしげふ哉　忠敬

けさかふるひさへ衣の輕き身もよ渡り安くなれる夏哉　榮

ぬぎかへて夏のあしたの空見れば雲の衣もひさへ也鳧　有經

今朝はしも漫ろ身にしむ夏衣ひさへに春を包み餘りて　櫑郁

青葉ふく風なほ寒み夏衣ふさはしからぬきのふけふ哉　正夫
衣をばひとへにかへて心さへ輕くなりたる此あした哉　鋼二
若葉ふく朝風寒みひとへ衣とり出たれどきられざりけり　胤明
唐衣夏にうつりて此朝げ重荷おろしゝこゝちこそすれ　英一
このあしたかへしひとへの唐衣起居輕くも成にける哉　義清

鷲

つめかくす鷲の心を知らずして宿すもあやふ鷄の林に　正風
奥山の木葉ゆすりて飛鷲の聲にこたまのどよみける哉　詮
羽黒山杉の梢にゐるわしのかゞなく聲のもの凄さかな　利皂
すさまじき山松風にまじりても鷲のかゞなく聲聞ゆ也　忠敬
村鳥もちり亂れけり荒鷲の檜原ゆすりてわたる羽風に　榮
とぶ鷲の翼の風に夏山の木々の瑞枝はをれふしにけり　有經
山高く己れかゞなく荒鷲もとりてやきなん猛荒雄の友　楯郁
大杉の古葉亂れてあらわしのたつ音高し木曾のおく山　正夫
雲かゝる嶺の大いは荒鷲の翼やすむるところなりけり　鋼二
かり人のまつとも知らず熊鷲の高麗路越に羽延ばす鷲　胤明
恐ろしき爪のありとは熊鷲の隱すとすれど顯はれにけり　英一
犬猫もとりひしがれて荒鷲の猛き爪には及ばざりけり　義清

●技藝科生募集　女子高等師範學校にては、此度、新規則により、技藝科を設けしが、既に若干名の入學者ある由なれども、今回更に、補缺若干名を募集する由。志願の向は、六月二十日迄に願書を差出さるべし。該入學試驗は、來六月廿六日より施行の筈にて、試驗科目は、体格、國語、數學、理科、裁縫、習字、毛筆畫等にて、志願者の資格は、師範學校女子部、修業年限四ヶ年、官公立高等女學校卒業生、及、之と同等の學力を有し、年齡十七年三ヶ月以上二十二年三ヶ月未滿にて、夫を有せざるものなりと云ふ。

●女子大學　寄附金募集を中止し、立消えしかとまで怪しまれたる同大學は、去し八日、帝國ホテルにて創立委員會を開き、大隈伯、岩崎男等出席し、再び募集を始むる事となりたりとぞ。

●帝國婦人協會　同會の創立にかゝる實踐女學校女子工藝學校は、去し七日、授業始の式を擧げ、來賓は、細川華族女學校長、及、日野伯等數十名にして、立食、茶菓等の饗應ありしと。

●女子英和講習會　同會にては、本年四月より、更に官立高等女子師範學校、附屬高等女學校、及、府立高等女學校等の入學試驗受驗者の爲めに、豫備學科を

加入せりといふ。

●鳥海女學校　鹿を馬といひしは、異國の古りし例なれども。羊肉を掲げて狗肉を賣るは、今もむかしにかはらぬぞうき。こも猶、利をあらそふ商人の上には、恕すべきふしもあらんか。されども、人物を良成する學の庭にこれあらんとは、うたてき事のかぎりなりかし。世の噂、强ち信はおき難きも、風なきに漣は立たず、煙の上る處、火氣の潜めるありてふことを思はゞ、豈、多少の因なしと謂はんや。厚さ、僅に一寸の門札、表は美しく女學校とあれども、裏は正しく、伏魔殿とよまれぬと、某新聞が傳ふれど、又某新聞は、揑造の投書なりとも、傳ふ。記者は質に、其の妄説ならんことを祈るものなり。

●行と心　罪人としいへど、正なきものにはあれども、其の内情を探りなど、分別の力乏しくて、親を養はんが爲に、他人の品を盗み、掟にふれし果敢なきものもあらん。これ如何なる罪故にて、いましめの身となりたるやらん。府下小菅集治監に、鈴木德次郎といふあり、世には兩親もなき身なれども、只、今年八十五歳なる一人の祖母の品川のさる方に養はるゝがあるのみ。德次郎は、晝猶暗き囚屋の中、雨に風に祖母を思ひ出で、常にも祖母在す方に足のばして寐ぬることとなしとかや。同人は、其の日〳〵の勞働の賃錢の中より、下賜せらるゝ少額の金を貯へ置きしが、何時しか一圓五十錢となりけるを、此度其筋の手を經て、祖母の許に差送りたりと。あはれ、この事にして、僞なかりせば、如何にして斯るもの、囹圄の中に繋がるゝ身とはなりしか、不審しき事といふべし。

●孝心重寶を取り戻す　孝子の一念は、神も受けさせ給ふとかや。芝區某町に糟屋某といへる書家ありけり。先代は會津藩に事へて重く用ゐられたるが曾て藩主よりいとも珍しき一面の硯を賜はりて、家重代の寶として傳へしに、明治初年、某は世を去り、その子温の代となりしところ、世の變はるにつけて、家政貧し

くなり、己むを得ず、温の母は、硯をも賣りて米鹽の資となし丶かども、主の賜物いとゞ咎むる處ありて、後は悔しき言のみいひ居たりしが、病に冒されて死するに及び、寶を失くし、先の人にあひていひ譯なし、逝いたる後は余に代りて買戻せと、尚、呉々も遺言して死にき。温、その言を肝に刻み、常住、硯を取り戻す事を心掛けしが、次第に暮しも豐に成れるに、今は如何に價高くとも、母の遺志を遂げでやはと、某骨董屋に話せし處、日數經て其者、是にはあらずやと持ち來りたるものをみれど、母の言葉に寸分も違はざれど、その所有主の家に到り、事の由を語りけるに、所有主もその志に感じ、廉價をもて讓り渡したり。温、悦びいはん方なく、硯を母の菩提に持ち行き、祖先の法會をも營みたりといふ。

●小使に年金恩賜　朝に業を執りて、夕に倦き、給俸唯是本と思ひ、東奔西走常なきを人情として敢へて怪しまざる今の世に、さりとは珍しき話あり。東京虎の門内なる露國公使館に石井與一と呼ぶ小使あり。額に苦勞の浮波繁く、頭に霜を頂いたる、七十歳近き老人なるが、同公使館の猶函館に在りし時分に雇はれしより、今に至るまで三十八年間一日の如く、忠實にいそしみ勉めたる功により、今は老衰して何の用にも立たねども、解雇せず、加之、勤勉の程を感じ、同國皇帝陛下に奏聞しけるに、恭くも年金を下賜せらる丶事になりたりとぞ。されど、假令解雇せらる丶も、生活には不自由せず、安樂に老を樂しまる丶身となりしとなん。勉强は幸福の母なりとは是等の事をいふぞかし。

●學生の友愛　徳島縣那賀郡山口小學三年生江川正一、庫元隆義は學術優等にして交々首席を占む。一日歸宅の途中、一年生江川某が腹痛にて、路傍に泣き倒れんとするをいたはり、背に負ふて其の宅に送り屆けたりと、學生は皆かくありたき事にこそ。

●生徒の悲境　陸前登米郡、及、遠田桃生兩郡の一

部は、昨年の洪水に甚しき害を被り、之が爲、小學生徒にして、用具を購求し得ざるもの、六百一名、行厨を携ふ能はざるもの六百五十二名、用具行厨共に辨じ得ざる者、千二百六名ありと。いと哀れなることどもなり。

●子守歌改良　兵庫縣加西郡私立教育會は、鄙猥なる子守歌を修身的のものに改良せんことを企て、每週一度、子守を集め、一回五首宛を授け、其意味を講和し、四十首以上を暗誦する者には賞を與へて奬勵しつつありと、其の內、敎育勅語に依りて作りたる子守歌左の如し

(克く忠に)國は日の本お天子樣の、御恩忘るなつゆの間も、(父母に孝に)深い惠みにかひないわたし、いつか返へさりよ親の恩、(兄弟に友に)むつまじくせよ兄弟中は同じ五本の指ぢやもの(夫婦相和し)松をみさをの手本と定め枯て落つるも夫婦づれ、(朋友相信じ)れ友達衆に義理盡すのは、みんな我が身に盡す義理(博愛衆に及ぼし)表口から施しすれど、戾りごんすげな裏口へ、(學を修め)今は斯して子守をすれど一生無學でくらしやせぬ、(業を習ひ)子守するのもこゝ一二年習ひましよぞや針しごと、(智能を啓發し)鈍い刄物も硏ぎよで切る人も勉强で智惠がつく、(德器を成就し)心一番しごとは二番さりよはようてもわるうても、(公益を廣め)久留米絣のお傳さんも女子、私も女子ぢや敗はせぬ、(世務を開き)男だかりて苦勞をさせて留守をするのが能ぢやない、(國憲を重んじ)コレサむゞさん時世が違ふ可愛孫でも國の爲め、(國法に遵ひ)もうしこれもしこれもしなもし何か落ちます袂から、(義勇公に奉じ)國の爲めには唐辛くても、うかといひまいからかつた●●●

●强盜の感恩　一夜强盜刀を提げて某方に押入り、主人夫妻を脅迫し、金三圓を奪ひしに、誤て蠟燭の火賊の衣類に燃え移り、ぼろ〳〵となりしを、主人見兼て綿衣一枚を與へけれど、賊は、大に感じ、金を還へ

し衣類のみを貰ひて去りたりと。

●大珊瑚樹　此程鹿児島縣下にて、大珊瑚樹を採取したるものあり。農商務省出張技師の調査によれば、品質良好他に比すべくもあらず。其の重量六貫八百目ありし由、巴里の萬國博覧會に出品する事となれりと。

●三十六貫目の老女　吉原香川縣知事の北堂は、本年八十九歳の高齢なるが、脂肪に富み、体量三十六貫目ありと云ふ。

●發掘物　陸中紫波郡徳田村は、地の原中に小阜ありけり。所有者之を發掘したるに、曲玉五個古剣二本、及、鍔數枚、土中に埋れ居たるを發見せり。蓋同地は、別に狄の森と稱して、往昔夷人の群居せし所なりきと。

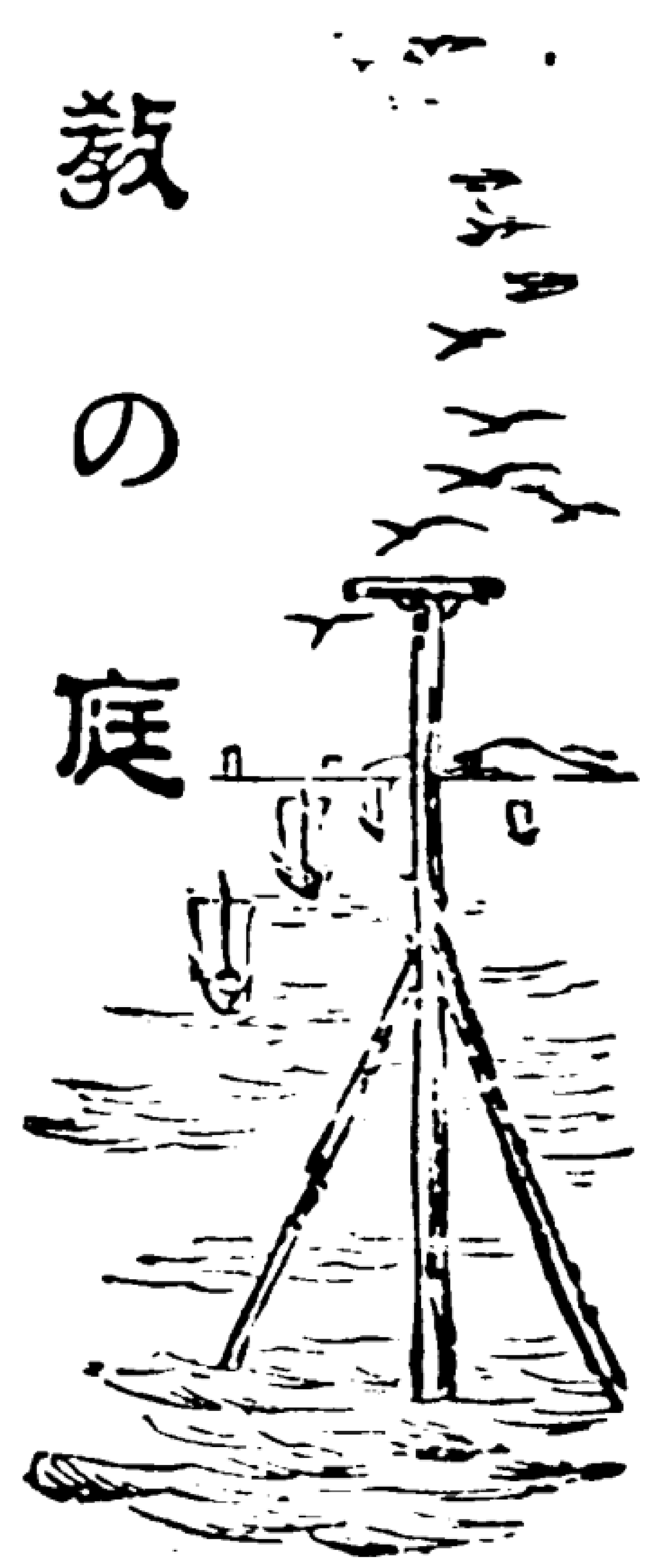
●神夢　備前片山某、所有地内池浦山林の稲荷へ、娘の安産を祈りしに、夢に、山頂の埋藏物を發掘せよとの告あり。娘も亦、同一の夢を見たるを奇とし、試に、山頂を發掘すれど、長六尺餘の石棺あり、蓋を披きしに中より曲玉一個、管玉十三個、鏡一個、及劍の折一本出でしと云ふ。

●鯉の化石　信州鹽尻村の石工、同村岩鼻に於て、石材採掘中、一坪餘の巨石の中に、鯉の化石の存在せるを發見せり。此の化石は、大骨より首尾鰭等に至るまで完く備れりと云ふ。

●新刊批評

●春日局　岸上質軒著　博文館發行

行文流暢、敘事面白く、一読年少者も解し易ければ、益する所、亦、大なるべし



教の庭

五月廿日兼題　牡丹

天　栃木縣上都賀郡鹿沼町字厩町　西村杏子

ゆふ露にあさ日に花のいろはえて
すがたけだかきはつか草かな

地　栃木縣宇都宮市一條町　濱野時子

あれはてし庭にさけれどふかみ草
とみたる色はかくれざりけり

人　三河國宮坂郡下地町　永井さい子

色も香もとめるのみかはふかみ草
花のすがたもけだかゝりけり

秀逸（十首）

いつしかと待にし花のさきしより
めづるこゝろのふかみ草かな　肥後　田代艶子

とぶ蝶のはかせもいたく香るなり
いろふかみぐささきの盛りは　越前　尾倉益子

なみならぬ花ぶさのみか色香さへ
とみにとみたる深みぐさかな　甲府　阪田さみ子

庭もせに色ふかみぐささきみちて
うきことなげにみゆる宿かな　山形　武田粲子

ゆく春の形見とてこそさきぬらめ
からくれなゐの色ふかみぐさ　東京　牧瀬かう子

あかでちりし花の歎きもわする迄
うれしきものは牡丹なりけり　東京　諸井久良子

花のいろもをきそふ露もふかみ草
そのふにあまる匂ひなりけり　東京　吾妻ちか子

ゆく春の形見にさける花といへど
をしむこゝろのふかみ草かな　松山　野中あさ子

おのづからゆたけき色のふかみ草
世にあらそはぬすがたなりけり　横濱　敷島花子

とくちりしさくらにかへて深見草
花ははづかときくぞたのしき　三河　服部萬子

（以下原稿到着順）

ゆく春をかきれにさめてふかみぐさ
はなのいろさへあさからぬかな　友永章子

みればなほいろかもさらにふかみ草
うべおほきみの名にはおひけん　吉富彥子

さきそめしその日よりしてはつか草
あかずもわれはながめけるかな　永目甚子

しづがやににげなく匂ふはつかぐさ
みるひさおぼしはなのさかりは　那須昌子

今朝みれば今をさかりのふかみぐさ
ひさまちがほにさきにほふなり　村崎包子

さきいでゝ庭の面せまくなりにけり
いろふかみぐさはなのゆたけく　黑田明子

いづこにも花はあれどもわがそのゝ
いろふかみぐさひさにみせばや　虎口資子

中にはにまなびのまどもてるばかり
いろふかみぐさきぞにほへる　濱口貞子

このごろは色ふかみぐさ咲きいでゝ
あかぬながめに日をぞおくれる　中山富子

つきゆきのきよきこゝろを深みぐさ
はなのいろかにこめて咲くかな　中村藤枝子

かぞふれば春の日かずもはつかぐさ
げにいひしらぬいろ香なるかな　澤井しん子

いひしらぬ濃きくれなゐの交りつゝ
その生ににほふかみぐさかな　澤井國子

色も香もさみにさみたるはつかぐさ
うべもみかごさあふがるゝかな　羽室象子

くれなゐの色ふかみぐさきのふ今日
三つ四つふたつはなさきにけり　安孫かづ子

いつみても色香なづかしはつかぐさ
はるのかたみさきそめしより　田代綾子

みな人のこゝろをそむるはなに香に
けだかくみゆるふかみぐさかな　坂本遊多歆子

そのいろの白きあかきもさり〳〵に
さみにさみたるふかみぐさかな　住山幾子

あさつゆに匂ひこぼるゝふかみぐさ
のちにやはなもてりまさるらん　菅原松子

すがのれのなかき春日もはつかくさ
しづかゝきれにさきにほふかな　森山惡以子

さきに匂ふ艶さへ香さへふかみぐさ
さかりひさしきはなにもあるかな　森山悅子

つゆふかくゑめるすがたのふかみ草
げにあはれなるはなにぞありける　稲原藍子

さり〳〵に色をつくしてさきにけり
にはのあるじのほうたんのはな　横山すが子

つゆをおひてひかげに匂ふ色みれば
うべもいひけりはなのおほきみ　横山柳子

賤がいほもつゆふかみ草さきしより
さふひさしげくなりにけるかな　高橋かれ子

ふかみ草ふかきいろ香はかられこの
れふれるかたにさきいでにけり　石井登子

はつか草はなのゑまひにひさなみの
こゝろもさもにうかれぬるかな　佐々小琴子

露をかざし匂ひこぼるるはつかぐさ
はなさくかげのなづかしきかな　佐々有鄰子

いつしかも軒ばのさくらちりはてゝ
あめにひもさくはつかぐさかな　森川儀子

ふかみ草つゆもおもげの花のうへに
れふるこてふもいさはれにけり　河田いし子

ふかみ草こきもうすきもうるはしく
こゝろまごひてをるねたもなし　河田ふく子

あさゆふにこゝろづくしのふかみ草
げにいひしらぬいろにさきけり　竹村貞子

くれなゐの色もびさしほふかみぐさ
はなみるほどぞたのしかりける　德永萬壽子

くれなゐのいろもゆかしきふかみ草
はるのなごりをはなにみるかな　德永廣子

おくつゆに花のいろかもふかみぐさ
はなのかたみとながめつるかな　小森田輝子

ませがきのうちに一しほふかみぐさ
いまをさかりににほひぬるかな　澤田重子

八重垣をこえてひさしほにほふかな
いまをさかりのほうたんのはな　澤田春子

ゆきゝにも目にとまりけり七重やへ
いろふかみぐさはなのさかりは　澤田十萬里子

ふかみぐさ花のきみてふ名にはぢず
さみたるいろのなつかしきかな　名取よし子

大かたのはなにおくれてゆくはるの
かたみにゝほふふかみぐさかな　名取正代子

ふかみぐさふかき色香に咲きいでゝ
うさきさもにも訪はれけるかな　立神富子

わがにはのふかみの草は咲きいてゝ
たぐひまれなる香をはなつなり　安原國子

うさがりし友もさひきぬわがやどの
ふかみのくさの咲きそめしより　園田直子

しづが家につゆふかみ草さきしより
さふひさたねずいろやうつろさ　林環子

おくつゆも匂はんばかりふかみぐさ
ふかきかなりはそのにみちつゝ　芳香子

二十日草しづがかきれにさきしより
しらぬひささへおさづれにけり　山根久子

ちるはなを惜しむあさより嬉しくも
ゑみさかへたるふかみぐさかな　山田稲子

こゝろなく手折りはねせしふかみ草
いさけだかゝるはなのすがたに　都水春子

つちかひでさかせし間のふかみぐさ　目黒佐喜子

ものたらぬしづが軒ばにさきぬれど
ふかくを見れどあくさしもなし　金森俊子

いひしらぬ花のかほりにむつるてふ
さみたろいろのふかみぐさかな　竹村竹呈子

くれなゐのいろふかみ草咲きいでて
つゆたまぶさのいろふかみぐさ　清水すみ子

おほかたのはなの色香をひさもさに
ひさりさきめくにはのおもかな　佐々敏子

さくらばなちりてさびしきわが庭に
こめてもにほふふかみぐさかな　飽澤まつ子

ゆく春ををしむいろさへふかみぐさ
いろふかみぐさささきにほふなり　橋本豊子

わがにはに春をふかめてふがみぐさ
なくさめがほにさきいでにけり　田村多豆子

おほかたの花のなぬかをみつばかり
いろかゆかしくはなさきにけり　村上みさを子

見榮ねさへまたひさしほのふかみ草
かされてにほふはつかぐさかな　小尾愛子

夕まぐれつゆにしをるゝふかみぐさ
はなのわうさしおもふものから　菊池忠子

こきうづき花のにほひもふかみぐさ
はなのこゝろもあはれさぞみろ　北里繁子

手弱女が木のめにろ手もはなやかに
笑みさかねたろすがたなろかな　徳永九頁子

ゆたかにも富をかされて咲くはなを
に匂ひをそふろふかみぐかさな　齋藤よし子

ゆく春のがたみさや見んふかみぐさ
はつかぐさきはたか名づけけん　山田琼子

あかぬいろ香をそでにつゝみて　一

うき雲さなにかいさはんはつかぐさ
まこさに富めろはなのさかりを　吉岡純子

咲きいづろいろがもいさゞふかみ草
たゞひさはなにはをにほはす　吉岡歌子

梅さくらうつろひ果てゝこのごろの
つゆに咲きけりいろふかみぐさ　三善綾子

ふかみぐさなにおふ花のいろふかく
うべも世ににぬすがたなりけり　野口よし子

なほざりのいろさやはみろ大きみの
名をしもおへろはなのさかりを　羽藤榮子

なかがきのこぞめの花のあさつゆに
ぬれていろさへふかみぐさかな　山田きよ子

ませがきの庭にあさ日のにほひきて
いろふかみぐさ咲きいでにけり　田坂芳子

あさひがげてりそふ庭のふかみぐさ
つゆさへそむろくれなゐのいろ　山田婦美子

おくつゆのこゝろもふかきふかみ草
にはのそでもあまろくれなゐく　山田靜子

くれてゆく春のなごりもふかみぐさ
ふかきいろかににほひぬろかな　岸崎豊子

ながめてもあかぬ色なりふかみぐさ
つゆもおもげににほふこのごろ　田尻さだ子

さゝ流くさふひさもなきしづがやに
にげなくさけろつゆふかみぐさ　尾崎嘉子

賤がやのかきねも今日はにほふらん
はろふかみぐさはなさきにけり　秋山錦子

おくつゆもおもげににほふふかみ草
はなのすがたをかぜなちらしそ　秋山もみぢ子

わが園のはなのあろじさ咲きいでし
すがたゆかしきふかみぐさかな　木家貫實子

ゆく春のかたみながらに咲きいてゝ
いろふかみぐさいつかさくらん　椎野ぬき子

牡丹見にゆきてちそうにあひにけり
さゝのひさ葉もさげて行かれど　足羽米子

草の名のはつかはふれどなか〳〵に
ちりをもすゑぬはなのいろかな　上杉光子

わが宿のまがきのもさにくれなゐの
こぞめに咲けりいろふかみぐさ　勝山忠子

世のつれにすぐれてにほふふかみ草
はなのこゝろにならひてしかな　野口三子

くれてゆく春にゆかりもふかみぐさ
さかりはつかさ日をながざりそ　日吉あさ子

露ながらはろのかたみさにほふかな
ちろまもをしきいろふか見ぐさ　細川ますゑ

一にだは手折りてみばやくれなゐの
いろふかみぐさ咲きそめにけり　高屋はき子

朝な夕なおばしまちかくたちよりて
見ろもうれしきはなふかみぐさ　本田つろ子

みろからにめさむろばかり咲滿みて
あかぬいろなろふかみぐさかな　青木治子

朝な〳〵ながむろにはのはつがぐさ
つゆおもげなろすがたやさしも　河原芳子

世の人にめではやさろゝふかみぐさ
ふかきははなのかにぞありけろ　萩原章子

みれど〳〵あかぬ色香のふかみ草
うべもさみたろはなにはありけり　月塚てつ子

香ぐはしきぼたんの園に入りくれば
うきよのほかのこゝちこそすれ　佐々木富子

さしごさに花さへかさへくはゝりて
いろふかみぐさ咲きいでにけり　　錦脇ます子

生ひたてし人のこゝろはふかみぐさ
うすくれなゐにはなはみゆれご　　松浦糸子

咲きしより花のはつかはみしかごも
いろ香はこさにふかみぐさがな　　新海わか子

おく露もいろ香もいさゞふかみぐさ
ちりはつろまでゆきてさはゞや　　片山あや子

庭もせにはや咲き初めてふかみぐさ
いろもに匂ひもいまさかりなり　　伊賀直子

おほかたの花にき匂はでふかみぐさ
ゆたけきいろにさきいでにけり　　新泉翠子

ふかみ草しむろなりけりおほかたの
はなにおくろゝはろのあはれは　　新泉さ代子

八重ざくらちりしかきれに粉もやゝ
のこりてに匂ふぼたんばなかな　　矢野安子

いづのよにたがさだめけんはつゝか草
はつかにはなのさきいでにけり　　田中信子

ゆくひさの足さむろまでわがにはに
お匂きくさけろはつかぐさかな　　河村君子

くれなゐの色ふかみぐさもろこしの
たがうゑおきてはなさなしけむ　　佐伯きぬ子

くれなゐの色ふかみぐささきしより
しづがかきれもゆだかなろかな　　白石うめ子

見ろ日をもはつかさきけばこの花は
なべてのはろにならはざりけり　　森こさ子

くれなゐの色香ゆたかにさく見れば
しづがいへゐもさみぐさのはな　　高木しげ子

さらぬだにゆだけき色のふかみぐさ　　笹子茂子

いろ／＼ににほへろ花のいろも香も
つゆもてそむろこもさふかには　　小林卓江

つくろはぬわが庭ながらふかみぐさ
ひさりしめたろふかみぐさかな　　寺尾さかへ子

ふかみぐさ色かゆたかにさきいでゝ
さきて見ろへくなりにけろかな　　寺尾まさ子

露をだにすゑじさめづゑさみぐさの
さびしきにはもにきはひにけり　　日高かず子

薄きこきいろくれなゐのふかみぐさ
はなにこてふをゆろしけろかな　　田中りん子

ふかみ草さきつゝに匂ふ日かずさへ
かきれにたかくに匂ひぬろかな　　畠山さよ子

しらつゆのたまもおのれの宿にして
さみてめでたきはなにぞありけろ　　滝谷いく子

うろはしく色ふかみぐさはなさきぬ
はなにむすべろふかみぐさかな　　宇高まつ子

大きみのめぐみのつゆのふかみぐさ
やまさこさばのに匂ひそへばや　　野口せい子

ふかみ草ふかくもに匂へなゝへ八重
しづがかき根もいろぞはにゆく　　下田春子

花ちりていづしかなつもふかみぐさ
いろ香ゆかしくさけろこのはな　　伊東與子

うめさくらちればまたさくふかみ草
いろ香ゆかしくさきに匂ひけん　　賀茂笹子

はなくはしさくらにつきて人みなに
はなのいろにもさめろやごかな　　村田多豆子

さくら花ちりしなけきをなぐさめて
めてはやさろゝふかみぐさかな
いろふかみぐささきに匂ひつゝ　　河合縫子

くさの名のはつかに花はかきらめや
なつまてにほへはなのかたみに　加藤敷子

白きあかき色なきそひてしつがやも
はるふかみぐささきいでにけり　寺田みち子

春もはやはつかばかりにくれなゐの
いろふかみぐさいまさかりなり　仁保しま子

ゆく春のかたみなればやふかみぐさ
さかりひさしきはなにぞありける　岸なみ子

はつかてふ名にし負へれは深見ぐさ
ふかきいろ香もなづかしきかな　由非浪子

春の日のひかりにさめろふかみぐさ
なれはさちあるはなにあるかな　瀬川總子

くれなゐのいろふかみ草さきしより
しづがかきれもうつくしきかな　高石登代子

もろこしの宮居のさましのばるれ
みぎりににほふいろふかみぐさ　杉浦栄子

さほ姫のかたみにのころころもかさ
見しはゆがしきいろふかみぐさ　杉浦栄子

ゆく春のかたみさぞみるふかみぐさ
ふかきはばなのいろばかりかは　吉田元子

園の中にはるのなこりさききいでに
めではやさるゝはつかぐさかな　吉田碩子

わかものどおもへばなしやはつか草
はやはなの名のなかばへぬれば　吉田靜子

園のうちの春のころやさ出で見れは
ぼたにのはなぞいまさかりなる　吉田幾代子

つちかひししるしもしろくはつか草
はなのいろ〳〵さきみちにけり　持地桃枝子

日かずふる雨のはれ間のふかみぐさ
ぬれたるいろのなづかしきかな　大谷津みれ子

もろこしの花のおほきみさきにけり
これなやはるのかたみさもみん　服部米子

もろこしの人もたゝへておほきみさ
いふもこさわりいろふかみぐさ　服部きん子

はつが草きよきいろかはおほかたの
はなのきみよさいふもうべなり　服部みち子

ませゆひてこぞよりまちし兆かひに
はるふかみぐさいまさかりなり　服部幸子

つゆみちていろこき庭のふかみぐさ
ねもいひあへぬすがたなりける　深谷清子

世なすてしいほりのませに身なよせて
こゝろゆたげく咲くぼたんかな　林口けふ子

五月廿日兼題　郭公

天　伊豫國松山市一番町　宇高まつ子

久しく音使せざりし友の許より、ふりはへて珍らしき事、おもしろき事など、こま〳〵いひおこせしに、いとなつかしくうれしくて、早く返事もせむやと思ふものから、晝はいとまなくて、漸々夜の更けたる頃、文机にむかひて、われをや書かん、これをやつげんと、和案じつゝ、墨すりてありけるに、窓の戸のすきまより、さと吹き入る風のなつかしきに、あはれ何處の花橘のかをりにかと、おもはず戸引き明くれむ、遠の山の端わから景色はみたるがをかしきに、やがて廿日あ

まりの月の、はづかしげに少女子のさしく乞計りのぞきいでたる、いみじう艶なり。いかで、郭公の一聲もがなと思ふ折しも、定かに夫れとわかぬまでかすかにはあれど、ひが事ともれはゑぬに、あなにくやと、心も空に打仰ぐ程もあらせず、こたびはいといとう冴かに、二聲三聲なのりて過ぎたる、げに哀れといふもなかなかなりや。あはれ都にはまつらんものを、いみじうもよき言くさ得たりとうれしくて、つねはおもき筆の、今日ぞかりはいとかるうおぼゑてなん、

地　　甲府。山田町　名取正代子

いつか〱とまちわたるゝは、年毎のならひなめれど、さてもいみじうおそき事よと、口ずさむ折しも、聞ゆる一聲は、夢かとぞかりうれしくなつかしきに、端ちかういでゝながむれど、昨日の春に引きかへて、露ならぬ五月雨の雲間に、月おもしろうすみわたれり。あはれ、今の一聲は、かなたにやありけむ、あたらしう行く方も知らざりしは、何となうおぼつかなきに、いかで折かへしてもきかせよかしとまつほどに、月もやう〱高うなりぬ。あたりはいよ〱物靜かになりぬ。夜やふけぬらん、ねよとのかねの音さへひゞきわたるに、まてども〱、かすかにだに聲せぬぞはいなき、さりとて、今更ふしどに入らむもいくちなしと、なほゑむしかたふく月におくがれつゝ、「きゝてこそなかなかゑたへ時鳥一聲すぎしあとのなごりを」と打ずんじ出づれど、さすがにあはれとやきゝつらん、いづこともなく、又かすかにもらせる二聲三聲は、げに雲間の月よりもめづらしうて、いよゝあかぬ心地のせられてなん。

人　　備前和氣郡閑谷　西艶子

花に霞に、春をうたひし鶯の、長閑きふしよりも、いとをかしう飽かぬは、夏の郭公になん有りける。散るを惜みてうらみし風さへ、今は床しく、小暗きまでに繁れる、青葉の中に、初音もらしたるを、待つともなくて、ふと聞き得たる、嬉しさは云ふも更なり、卯の花くたし、絶ゆる間もなく、徒然にのみ、ながめ暮したる折柄、將た、暗にも薫る、花たちばなの梢、過ぎがてに二聲三聲、ふり出でたるぞ、いと嬉しき。まいて、聞かましと、いもねで待ち渡りつゝ、今はと思ひ絶えたる曉方に、遠き雲井の、空ながら、聲さやかに名のりたるこそ、得もいはずなつかしけれ。されど、古人の、「聞く度にめづらしけれど時鳥いつも初音の心地こそすれ」と愛て稱へしも、實にうべなりけり。

（以下原稿到着順）

目黑　佐喜子

門田の早苗風に波打ち、軒の橘床しう薫る、夏の初の夕闇に、青葉閉されたる庵の窓さゝ押開き、燈火吹き消して、庭の卯の花眺め居れば、雨もつ空を何處ともなく、名のりて過ぐる郭公の一聲は、實に床しきも

のゝ一つなりけり。

佐々敏子

初聲のきかまほしさに、夜更くるまで待ちつゝありしに、軒の花橘ゆかしくかなりきて、ほのかに名のりいでたる、ひとりつれ〳〵なるまゝ、文机によりて、歌など口吟まんと筆とりし折りしも、み空高くなきすてたる、またなくうれし。されど、五月雨のをやみなくふりくらしたるわびしき夕は、あはれもひとしほふかく、わきてふる郷はなれし人の、血に啼く聲を聞きたらんには、腸もちぎるゝ思ひやすらん。幼きとき聞きしことあり、郭公の前世は人なるを、其身の悪業にて、今世には鳥と生れいで、あまりさきつ世のこひしきに、悲みやみがたく、日夜なきさけびて、血を吐くに至るなりと、こは、むかしの人のつくりはなしなるべけれども、けふこの頃の、なきしきる聲をきくにつけ、「夏山になくほとゝぎす心あらば、もの思ふわれに聲なきかせそ」の古歌さへおもひいだされて、いと哀れに堪へがたき心地せられてなむ。

吉岡歌子

三日月の影ほのかなる夕月夜に、なのりいでたるなつかしさは、云ふも更なり、橘の香をとめ、卯の花垣に初音を忍ぶなど、いづれか床しからざらん。ましてや、待ち佗びていねにし夜中の寐覚に、ゆくりなく唯一聲なきゝ知りたるは、いふばかりなくうれしくて、

寐覚して今かきゝしを一聲は
夢かうつゝかはつほとゝぎす

三善綾子

昨日までは花に愛しと恨みし風も、今はいと面白く、籬の卯の花さき出で、時ならぬ雪かと思はれ、前栽のたちばな床しうかなり初めたるなど、げにまたるゝは郭公なり、こその初音は、清子の君より洩れ聞きて、いと口惜しう本意なかりしかば、いかでことしは、初音を彼の君に告げ参らせんなど、思ひつゞくるに、心あわたゞしく、此の三日が程は、千歳の思して待ち詫びつるに、いかゞはしけむ、忍音さへ更にもちさす。

郭公いたくななしみそ一聲を
鳴かずも春は過ぎゆくものを

今宵こそはと、例の如く端近う出づるに、今まで晴れ渡りしみ空の、俄に潑墨をながしたらむが如く、いと大きやかなる雨さへ降り出でゝ、軒の玉水間近に音し、心細きこと限りなし。折しもあれ、遙か彼方の大空に、いと高らかに打鳴きたれば、驚き庭におり立ちて見やれど、いづこなりけん影だに見ゑず、

五月雨やあやめもわかぬ大空に
一聲名のるやまほとゝぎす

新井蝶子

三日の月は松の梢をもれ来り、くむ手に溢るつるべなは、獨り喞ちつゝある程となく、血に呼ぶ聲に驚きて、思はず知らず天を仰げば、一聲は月か鳴たか郭公、早や過ぎ去つて影もなし。

佐々有鄰子

郭公なきつるかたをながむればと、糸車くる女の童が、うたへるなきゝて、ふと窓のとおしあくれば、花立花の五月雨がゝるのきばにかをりあひぬる、いとなづかしくいとうるはしきものから、立ちよれば秋にふきくる夕風も、こころがらすずしくゆかしく、都にとほきかた山かげのいふせきすみかも、夏のうるさきことをうちわすれ、谷川の音さへ耳すましけるなりから、まこと一聲たかく、雲のはたてに鳴きすてたる、筆にも詞にも及びがたく、あといふばかりにて、そなたのかたのみうちながめて、

まちまちしこゑにはあれど夏のよは

と、うめき出でぬれば、れいの糸くる女の童が、

糸ひき車はやすぎにけり

と、したりがほなるも心にくしや。

勝山忠子

日頃降り續きぬる五月雨の、晴過る頃よりやみぬれど、曇り勝にて月さへ見ゑわかず、垣根續きに卯の花のみいとあらはなる今宵、郭公なのる

べく見ゆるものから、いかで一聲もがなと、待ち佗びつるものを、夜半過ぐる頃迄、鳴くべきけはひだになきは、いかにつれなきものなるよなどかこちつゝ、小窓の下を立たんとする折、そこともわかず一聲洩れ來るに、我こそは初音ききつれと、明けなば友にもほこらましなど、いとよろこばしくて、ふと見やる空には、姿は見えで、雨雲の往來のみ早し。あはれ、二の聲はいつこの空に、人の夢をや驚ろかしけんとおぼえて、いとにくし、

日吉あさ子

此鳥の死出の田長てふ名を負へるは、もろこしの諺に、亡き人の魂なりとて、蜀魂郭公、など云ひしより起りしとかや、げに軒の糸水音のみ高き五月雨の夜半、只何となく露けきに、一聲「かけたか」と鳴き渡れる、何地ゆくらんとなつかしく、そゞろになき人の忍ばれて、ひつやからなんと思ふばかりに、一しほ袖のぬれまさりてなん、

河原芳子

我宿の池の藤波咲きそめし頃より、はや聞かまほしう思ひわびて、幾度か山時鳥いつか來なかんと、かこちつゞけつ。くるゝかと見れば明ぬる短夜の、短かき夢もむすばなくに、待ち明す夜の多かるになど、怨ずる折しも、あはれ、ほとゝぎすの一聲高く啼きすてゝ、つぎは幽かに、雲間より洩れ來りぬ。あまりのほいなさに、庭におり立ちて、いづちいにけんと、花橘に問へどこたへず、たゞ、卯の花月夜影淡く、夢のごとき心地なりけり。

河村君子

咲そめしよりいつか來なかんと、待ちいそがれし池の藤波も、うつろひはてゝ、木々の青葉の茂りあひたるが、いといぶせくつれづれなるままに、里にこそまだなかれ、山路になどて神路山はらいりぬ、さても一聲だに聞こえぬは、いと口惜しう「時鳥こゑも聞えず、山びこは、ほかに鳴く音をこたへやはせぬ」と、古歌うちずゞるほど、やをら鳴き出てたるは、歌の心を聞きしりがほなりや。

田中りん子

軒端ににほふ橘の、ほとり過ぬるほとゝぎすを聞きて、古へ人の言の葉を思ひ出で、いとゆかしう今一聲きかまほしと、窓のほとりに夜もすがらながむれど、いつこ行きけん陰だにもなし、をりかへし枕になけよ時鳥と口ずさみしてまどろみければ、やがてねまちの月出て。有明の空とぞなりにける。

高橋かれ子

よるとなくひるとなく、咲き匂ふ花にうかれしおのが心も、梢の白雲いつしかきえて、青葉茂りあひ、何となく夏めきしきのふけふ、たゞまたるるものは山ほとゝぎすの初音にぞありける。一こゑもらせほとゝぎす、いでききかんと、松の戸あけてまちつるに、いかに忍ぶ初音ぞ、などかくは、われにつれなきか。今宵もいたく月ふけぬ、あかつききのこゑきゝもらすまじと、窓ちかくよりそふ折しも、ほのかになのる一聲、うれしともうれし。

まつ宵はいつしかふけて月影の
　おつるみそらになくほとゝぎす

初學子

青葉すゞしき昨日今日、雲井がくれの聲もきかまほしくて起きいでぬ、をぐらき梢ごもきりわたりて朝つゆしげく、みどりの色したゝらんばかりなり、折しもほどちかき雲間にて、いとゞさやかに二聲三聲きこえぬ、うれしともうれしかりけり、げにこのなのりこそ、こひしき君おとづれにもまさりて、ゆかしうおはにれ、ほとゝぎすなをも雲間にあげてよと、打見やれば、東のそらはほのぼのとあけて、有明の月名殘をしげにひかりあはくてらすのみ、

ほとゝぎす啼きつるあとをながむれば
　あるじがほなる有明の月

深山櫻

谷口房子

春はいつこにも咲きぬるものゝ、深山の花こそ、げに目出度けれ、木の本にうちつさひてめてはやす人もなければ、又手折りてちらさるゝうれひもなし、たゞ朝夕雲さりの宿さなるのみ、されはうつせみの人に媚ふる色もなく、浮世のちりにしまて、松のひまより梢高く匂ひ出でたる、誠に此の花の姿こそ、昔の君子にもたさへつべれ、

春の夜に琴をきく　岡部やよ子

春の夜の徒然なるまゝに、おほろなる月のかけをたに見はやさ、まさくりありて空うちながむれは、未たはやまをいてやらて、ほのかにをのへの松のあたり白うみゆるも心憎しや、庭の面の花は、今を盛さ咲き匂へるか、かなたの枝は黑うして、定かにはわかれさ、こなたの枝は、やゝ明う、花のさまのみゆるが、そよ吹くかせにゆらめくまに〳〵、ねならぬかをりの、わか袂にほのめきくるなさ、言ひしらすうれし、折しもものゝ音のふさきこゆるに、あなゆかし、そも何の音なるかん、いたうもめてたきよさ、耳うちかたふけてきゝすませは、わか心のひかれぬるもことわり、日ころ好める大和琴の音なりけり、さるにても、いつこいかなるたをやめの、また如何なる思ひをこめてのすさひにか、いさゝ情ふかきしらへかなさ思ふもいさ樂し、雲井の月もこの琴の音にひかれけんほのかにかすめる姿めてたく、山のはにさしのぼれば、なつかしき花はこの月の光を受けて、一しほうるはしう、ゆかしき琴のねは、この月さ花さによりて、いよゝ妙にひきすまされぬ、噫徒然なりしこのよべも、今はなか〳〵に更け行くをうらむるわか心そわりなきや。

雨後花　吉田元子

雨はれてまだしらくもののこるかさ
　みねしはなちのさくらなりけり

歸雁　吉田せき子

ゆく雁のかげかあらぬかおぼろげの
　くも路にみゆるうすゞみのあさ

新竹　後藤のぶ子

わがやどの庭のわかたけしげりあひて
　つきもらぬまでなりにけるかな

つばくら　三善綾子

僞りのしげきうき世につばくらめ
　ふる巣だづねていまぞ來にける

落花風　谷口房子

吹きすさぶ風のまに〳〵にさそはるゝ
　花の心のかろくもあるかな

思往事　仝

はかなくてすぎし思へはゆめふから
　忘れがたきはむかしなりけり

水邊柳　仝

靑やぎのかげおもしろくなびくなり
　水の底にも風や吹くらん

撫子　岑崎登子

たらちねの敎の庭に生ひたちて
　ゆかしくにほふやまさなでしこ

勿來のせきにて　岡部やよ子

せきさいふなこそはのこれいにしへに
　匂ひし花はかけもさゞめす

春草　田中信子

春がすみたちたる野邊にもえいでゝ
　いろなつかしく見ゆるわかくさ

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子の本分

金銀摺彩色表紙
大和綴最優美

全壹冊

定價金廿五錢
郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我が國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて廣大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 （電話新橋八八） 國光社

近衛公爵題辭　黑田子爵題詠

故勝伯爵題辭　高崎男爵題詠

東久世伯爵題辭　島津久寶氏題詠

副島伯爵題字　寺師宗德氏序文

照國公感舊錄

國光社編纂　松本楓湖氏揷畫

全一册

定價金五十錢

郵稅金八錢

郵劵代用一割增

晩近**維新史**の攻究闡明に力を盡すの人多く隨て此間に於ける偉人傑士の傳記評論續々として梓刻に上るあるも獨り**島津齊彬公**の詳傳に至ては世未だ好適の著あるなく信憑すべき記なきは識者の常に遺憾となる所なり夫れ**王政維新の原動力**は薩に在り而して**薩の原動力**は實に齊**彬公**其人に在るを知らむ公が詳傳の維新史に欠くべからざるや又言を俟たざる也本書は**公が生涯を詳述**したるものにして、傳記尊王外交經濟文事民政撫恤の七大綱に分ち巻中の事蹟は一々**周密なる調査**を遂げ編者が經營慘澹の餘に成りたるものにして事を記する極めて**精細**筆を造る極めて**謹嚴**明窓の下之を繙かむ公が一生の閲歷、歷々として掌を指すが如く又以て**維新鴻業の由來を知るに足らん**製本亦清麗にして巻中揷む處の**楓湖畫伯**の圖畫と巻末に付する處の**明治諸名家**が追懷の和歌は錦上更に花を添ふるもの也

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　靜思館

生田目經德編

標注 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事 ○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事 ○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價	
一冊	拾錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊前金(半年分)	壹圓
全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十二年五月廿四日印刷
明治三十二年五月廿五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木良雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

新刊

家庭の鑑

菊版美本

全一冊

定價金拾五錢

郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠褒綬賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所　國光社

東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）

（明治二十四年八月四日内務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　國光社印刷部）